

デルゲ印経院とデルゲ土司に見る中国共産党のチベット政策

川田 進

知的財産学部 知的財産学科
(2008年5月30日受理)

Consideration for the Tibet Policy of the Chinese Communist Party
through Dege Sutra-Printing Academy and Dege Tusi
by
Susumu KAWATA

Department of Intellectual Property, Faculty of Intellectual Property

(Manuscript received May 30, 2008)

Abstract

Dege Sutra-Printing Academy (徳格印経院) located in Dege County, the Garze Tibetan Autonomous Prefecture of Sichuan Province, is the holy site in Tibetan Buddhism that was founded by Dengbazeren, the 12th *tusi* (headman) of Dege. The purpose of this paper is twofold: first, to give an overview of the relationship between Dege *tusi* and Dege Sutra-Printing Academy in terms of politics and religion; and second, to discuss the realities of the Chinese Communist Party's religious policies and the united front activities with a focus on the administrative situation in the academy from the foundation of the People's Republic of China up until today. Special attention is given to providing insight into the situation of Dege Sutra-Printing Academy during the Great Cultural Revolution, based on new material as well as the findings from a field study.

キーワード; デルゲ印経院, 徳格県, ヤンリンドジェ, 孫明経, 程徳美, 中国共産党, 統一戦線活動,
文化大革命, 四旧打破

Keyword; Dege Sutra-Printing Academy, Dege County, Yanglingduoji, Sun Mingjing, Cheng Demei,
Chinese Communist Party, united front, Great Cultural Revolution, demolishing the four olds

1. はじめに

1.1 徳格訪問 (2003年8月)

デルゲ印経院は、四川省甘孜(カンゼ)チベット族自治州徳格(デルゲ)県に位置するチベット仏教徒の聖地である。印経院とは経典や各種文献を刻版・印刷する工房であるとともに、チベット仏教の教義と信仰を支える各種版木を所蔵する「知の保管庫」でもある。印経院は1729年の創設以来、刻版、製紙、製墨、印刷等の高度な伝統技術を約280年にわたって脈々と受け継いできた。そして約30万枚にも及ぶ版木にはチベット仏教各派の学問とチベットの文化がしっかりと刻み込まれている。

徳格県は四川省成都から川蔵北路を約1,000km 進んだところにある。西へ更に20km ほど入り金沙江を渡った先はチベット自治区である。現在長距離バスを順調に乗り継げば、成都から徳格へは三日で到着可能である。この地に大蔵経の版木が眠る印経院があることは、日本では専門家を除けばこれまであまり知られていなかった(図1)。筆者は2003年8月に徳格県更慶(ゴンチェン)鎮を訪問した。印経院は町の中心部から徒歩で5分、丘の中腹に位置している。近隣に住む老若男女の信徒が夜明けとともにやってきて、数珠やマニ車を手に印経院の周囲を何度も巡っている。建物の外壁沿いには真言を刻んだマニ石が多数置かれており、ここが信仰の場であることを示している。



図1 デルゲ印経院 (2003年8月)
Fig.1 Dege Sutra-Printing Academy (August 2003)

印経院を見学する際、特別な手続は不要である。25元の入館料(当時)を支払うと、漢語を話せるチベット人ガイドが案内してくれる。版木の盗難と火災を未然に防ぐ必要上、一般観光客はガイドの指示を無視した勝手な行動は許されない。経典の印刷は主に3階の明るいテラスで行われている。二人の印刷工が向かい合って坐り、一人が版木に墨を塗り、もう一人が紙を敷きローラーをかける(図2)。息のあった二人の作業は目にも留まらぬ早技である。版木の運搬係を含めて、彼らは三人一組で一日に2000枚から3000枚を刷り上げる。印刷工は20歳前後の青年が多く、大半が近郊の農村からやって来た季節労働者である。印経院で働くことは地元のチベット仏教徒にとってこの上ない功德であり、現金収入の少ない農民には貴重な収入となる。仏の教えを刻んだ版木のみならず、印刷に使う紙・墨・朱砂すべてに仏の心が宿るとチベット仏教徒は考えている。版木を洗った水は、厄を除き万病に効く聖なる水と見なされており、わざわざ持ち帰って服用する者もいる。



図2 経典を印刷する印刷工 (2003年8月)
Fig.2 Printers printing Buddhist sutras (August 2003)

印経院の向かいに立つ管理棟の1階では、版木に文字を刻む作業が行われている。刻字には高い技術と強い忍耐力が要求される。一枚の版木両面に文字を刻むには、熟練工でも丸二日かかりである。厳しい検査に合格した版木だけが、印経院に収められ

る。刻版の技術は親から子へ伝授され、職人は徳格の他に金沙江を越えた江達(ジャムダ)からもやって来る。江達はかつてデルゲ土司の支配地であったからだ。彼らの優れた技巧はチベット全土から尊敬を集めている。

1.2 「デルゲ」と「徳格」

デルゲ印経院の呼称について触れておく。チベット語では一般に「デルゲ・パルカン」と呼ばれている。「デルゲ」は地名、「パル」はチベット語で「写真」「印刷」、「カン」は「建物」、「パルカン」は「經典の印刷工房」「版木の保管庫」を意味する。漢語では一般に「徳格印経院」と呼ばれている。「徳格」は現地のチベット語音「デゲ」の音訳である。「印経院」は「パルカン」の漢語訳であるが、チベット語の持つ「版木の保管庫」という役割は伝わりにくい。漢語ではその外、「札西果芒大法庫印経院」¹⁾「徳格吉祥聚慧院」²⁾「徳格印経宗教宝庫」³⁾という名称もある。日本の仏教学では「デルゲ版大蔵経」という名称が示す通り、「デルゲ」という表記が定着している。池田巧によると、現代チベット語のラサ方言では「テケ」、カム方言なら「デゲ」に近い音である⁴⁾。本稿では「デルゲ印経院」「デルゲ土司」の名称では「デルゲ」を、地名の場合は「徳格」もしくは「徳格(デルゲ)」の表記を用いることにする。「デルゲパルカン」ではなく「デルゲ印経院」を用いる理由は、「パルカン」という言葉が意味を喚起する力に乏しいからである。

1.3 先行研究

デルゲ印経院に関する研究は以下の三種類に分類可能である。

- (a) 印経院の歴史と構造に関する研究
- (b) チベット仏教学からの經典研究
- (c) 中国共産党の宗教政策を中心とした研究

ここでは本稿が対象とする(a)と(c)にしぼって述べていきたい。

- (1) 多田等観『チベット』岩波書店、1942年。
- (2) 多田等観「パルカンについて」『日本西藏學會々報』第5号、1958年9月、1-3頁。
- (3) 『徳格印経院』四川民族出版社、1981年、1-7頁。
- (4) 多田等観『チベット滞在記』白水社、1984年。
- (5) 武田雅哉「デルゲ取経記」、『北海道新聞』(夕刊)1984年3月21日・22日・23日・24日・26日・27日。
- (6) 「徳格印経院」, 格勒『甘孜藏族自治州史話』四川民族出版社、1984年、149-156頁。
- (7) 谷川「徳格印経院概述」、『西藏研究』1987年第4期、28-33頁。
- (8) 中西純一「チベット徳格印経院を調査して」、『月刊しにか』第10巻第4号、大修館書店、1994年4月、2-5頁。
- (9) 「印経院」、『徳格県志』四川人民出版社、1995年、421-439頁。
- (10) 「土司」、『徳格県志』四川人民出版社、1995年、440-474頁。
- (11) 中西純一「チベット デルゲパルカン」、『季刊民族学』第79号、財団法人千里文化財団、1997年1月、28-43頁。
- (12) 中西純一「チベット徳格印経院を調査して」、『月刊しにか』1999年4月号、大修館書店、2-5頁。
- (13) 楊嘉銘『徳格印経院』四川人民出版社、2000年、13-37頁。
- (14) 鎌澤久也「徳格の印経院」、『Front』第13巻第1号、リバーフロント整備センター、2000年10月、59-63頁。
- (15) 鎌澤久也「徳格・最後の印経院」、『月刊しにか』第11巻第12号、大修館書店、2000年12月、巻頭・102-103頁。
- (16) 中西純一「デルゲ・パルカン(徳格印経院)とそれを支える土地の人々—チベット大蔵経の木版印刷工房」『トヨタ財団レポート』第95号、2001年5月、3-6頁。
- (17) 澤爾多杰「世界蔵文化宝庫—徳格印経院」,

- 『雪域康巴文化宝庫——徳格』中国三峡出版社，2002年，47-52頁。
- (18) 澤爾多杰「璀璨奪目的民族文化宝庫重放光彩——維修徳格印經院工程親歴記」，『雪域康巴文化宝庫——徳格』中国三峡出版社，2002年，53-60頁。
- (19) 孫明経撮影，張鳴撰述『1939年：走進西康』山東画報出版社，2003年。
- (20) 池田巧・中西純一・山中勝次『活きている文化遺産デルゲパルカン——チベット大蔵経木版印刷所の歴史と現在』明石書店，2003年。
- (21) 『徳格巴宮 雪山下の文化宝庫——徳格印經院』(VCD)四川電視音像出版中心，2000年。
- (22) 『徳格宝地——康巴文化的發祥地 嶺・格薩爾王故里』(VCD)中国唱片成都公司，2003年。
- デルゲ印經院とデルゲ土司に関する基礎資料として重要なのは『徳格県志』に収録された(9)と(10)である。(13)はチベット人研究者による印經院研究の最新成果であり，豊富なカラー図版を収録している。(17)と(18)は徳格在住のチベット人幹部による徳格文化論の一部である。(19)は1939年に孫明経が西康省の學術調査を行った際に撮影した資料であり，約70年前の印經院の貴重な写真が収められている。(5)は1984年の徳格と印經院を日本人留学生の目を通して描いたものである。(8)(11)(12)(16)は中西純一(映像作家)によるデルゲ調査の記録である。(20)は中西を中心とした印經院研究の成果として注目される。(21)(22)は印經院に関する映像資料である。印經院での作業風景は長らく撮影が禁止されていたが，2000年以降映像で紹介されるようになった。
- (23) 八巻佳子「チベット語の興亡と出版物の現状」，『アジア研ワールド・トレンド』18号，1996年12月，7-9頁。
- (24) 堀江義人「チベット語大蔵経，文革逃れ10万枚 中国四川省・徳格印經院」，『朝日新聞』(東京版夕刊)2001年10月22日，8頁。
- (25) 澤仁鄧珠「灑向雪域都是情——訪四川省政協原

副主席楊嶺多吉」，『四川蔵学研究(五)』四川人民出版社，2002年，20-35頁。

- (26) 「雪域香巴拉文化宝庫」『西藏旅游』2004年第3期，12-25頁。
- (27) 程徳美『高山反応——程氏一家四代的西藏情結』中国蔵学出版社，2005年。
- (28) 堀江義人「徳格印經院——チベット文化を死守」『天梯のくに チベットは今』平凡社，2006年，261-269頁。
- (23)～(28)には，文革時期の印經院に触れたものである。(25)は文革期におけるヤンリンドジェと周恩来の關係に言及した文献として最も重要である。(24)と(28)は日本人新聞記者による初めての徳格取材報告である。(27)は紅衛兵の視点から徳格の「破四旧」の状況を記述した回顧録である。

以上の先行研究の中で，(a)の研究では(5)(9)(10)(13)(19)(20)，(c)の研究では(25)(27)(28)を筆者は重要視している。

1.4 武田と中西が見た印經院

日本人が実際に見た印經院を考える上で，武田雅哉の見聞と中西純一の調査は注目に値する。1983年春，武田(現在北海道大学教授)は中国留学中に徳格を目指した。帰国後『北海道新聞』に発表した「デルゲ取経記」(1984年3月21日～27日，夕刊，6回連載)には，当時の徳格の様子や印經院の活動状況が紹介されていて興味深い。徳格県が外国人に開放されたのは2000年頃であるが，1990年代に入ると徳格へ取経に赴く学者肌の外国人が現れてきた。しかし1983年といえは徳格にはまだ人民公社が残っていた時代であり，対外未開放のチベット人居住地区に外国人の滞在が許されたのは，留学生という行動の自由がきく身分の他に，彼の類まれな行動力があつたからに相違ない。武田は印經院では暖かく迎えられ，チベット人公安局員は遠来の客を成都へ追い返したりはしなかった。

印經院が所蔵する版本は約21万7000枚，版木を保

護するため一つの版木で三日おきに10枚ずつ刷るそうだ。武田が徳格で出会った青海省の僧は12,000円で經典印刷の注文を行った。院内には診療所があり、老僧が診察に当たっていた。印経院では一日に二度読経を行い、宗教的色彩を色濃く残していた。当時康定から徳格行きのバスは不定期で、せいぜい週に一便程度しかなかった。バスがなければトラックを拾って荷台に乗り込まねばならない。未舗装の悪路と車輛故障につきあいながら、武田は成都からバスとトラックを乗り継いで四日目にデルゲに到着した。彼にとって自らを玄奘になぞらえて徳格へ取経の旅に出ることは、苦難ではなく快樂であったに違いない。

中西純一は中国留学経験をもつ映像作家であり、1996年夏に徳格を訪問し、印経院の取材と写真撮影に成功した。その成果は『季刊民族学』第79号に掲載され大きな反響を呼んだ。印経院に足を踏み入れた中西の感動と興奮を、カラー写真と文章から感じとることができる。この時中西の心を打ったのは、印経院が今も伝統的手法で經典の印刷を行っていることであった。中西は印経院を「活きている文化遺産」と高く評価し、トヨタ財団から「チベットの木版による仏教經典印刷寺院デルゲパルカン(徳格印経院)の經典システムの研究」というテーマで研究助成を受け詳しい調査に乗りだした。そして池田巧(言語学者)、山中勝次(生物学者)の協力を得て、2003年に調査結果を『活きている文化遺産デルゲパルカン』(明石書店)にまとめあげた。中西は著書の中で、印経院を「活きた文化遺産」として保護し存続させる必要性を訴えている。特に地域社会との関係から「信仰の中心、地域のシンボル」「雇用と地域文化の活性化に寄与」「地域の自然を保護し、活用する」「識字教育に寄与」という四つの意義を主張している。映像作家として印経院の存続に情熱を傾ける中西のプロジェクトの進展に期待したい。

1.5 問題の所在

中華人民共和国建国後、印経院は幾度も政治の洗礼を受け苦境に立たされたことがある。とりわけ1966年に始まった文化大革命の嵐は四川省徳格県でも容赦なく吹き荒れた。造反派や紅衛兵は「破四旧」(四旧打破、四旧とは旧思想・旧文化・旧風俗・旧習慣)のスローガンを掲げて、県内各地の仏教寺院や宗教施設をことごとく破壊していった。ところが、「四旧」の代表格とも言える印経院は破壊の標的とされながらも実際の被害は比較的小さかったことは事実である。当時、誰がどのような方法で印経院を守ったのであろうか。筆者は1990年代半ばよりこの疑問を抱いてきたが、文革時期チベット地区における政治と宗教に関する歴史資料は、これまで大半が非公開であったため印経院の実態を知る術はなかった。しかし、2002年ヤンリンドジェの証言、2005年程徳美の回顧録が発表されたことにより、疑問を解く糸口が見えてきた。また、筆者は2003年8月に徳格を訪問し、文革期の印経院に関する聴き取り調査を行ったことにより手掛かりをつかむことができた。

本稿は先ずデルゲ印経院の歴史と構造を土司制度を通して概観する。次に民主改革(1956年～58年頃)から文化大革命(1966年～76年)そして現在に至る期間に焦点をあて、文献資料と筆者の調査に基づき、中国共産党が印経院と土司を利用した統一戦線活動の内容及びチベット政策の実態を明らかにしていく。筆者は2005年に拙論「デルゲ印経院を守り抜いた書記と医師——周恩来のチベット政策と世界文化遺産・四川省徳格県」⁵⁾を発表した。本稿は主に文化大革命期における印経院という視点から再構成し、新出資料に基づき大幅に加筆したため、記述内容に前稿と重複する箇所があることを断っておく。また、チベット音の不明な人名と地名については漢語表記のまま留めた。必要に応じてチベット語音と漢語名を併記した。

2. 土司と印経院

2.1 デルゲ土司

1729年にデルゲ印経院を開設した人物は、第12代デルゲ土司テンパ・ツェリン(登巴澤仁, 1678～1739)である。土司とは元から清にかけて中国西南部の非漢人地域に存在した官職名である。歴代王朝は各地の首領たちと君臣に似た関係を結び、彼らを土司・土官に任命し、支配地域の統治権を与えた。各王朝は土司制度を通じて、広大な非漢人地域を間接的に支配したのである⁶⁾。

徳格にはもともと林葱一族と徳格一族という二大勢力があった。林葱一族は6世紀以前に誕生し89代続いたと言われているが、民主改革時期(1956-58年頃)に系譜と資料を失ったため一族の詳細は不明となった。11世紀頃、政治力と軍事力が増大し、勢力範囲は現在の四川省甘孜州北西部、チベット自治区チャムド地区、青海省玉樹、黄河源流域一帯にまで及んだが、明末清初にデルゲ土司が台頭すると林葱土司の力はしだいに衰退していった⁷⁾。

一方、デルゲ一族は6世紀頃に始まり53代続いたとされている。「デルゲ」の名は、パクパ(パスパ、八思巴、チベット仏教サキャ派の座主)が与えた称号に由来する。デルゲ一族第30代烏金巴の弟である索郎仁青はパクパに認められ「四徳十格之大夫」という称号を授かった。15世紀初、一族第35代徳欽四郎絨布はカトク寺(嘎托寺、現在の四川省白玉県)の僧・本青更登降本(本青更登降村、徳欽四郎絨布の兄)の勧めで、現在の四川省徳格県龔埡に居を移し、称号から「徳格」を一族の名称とした⁸⁾。以下、約500年にわたるデルゲ土司の歴史を概観する。

元朝初期、一族第30代から35代の時期は、現在の白玉(ペユル)と理塘(リタン)を支配するにすぎなかったが、15世紀中頃、本青更登降本の次男・扎西生根が一族第36代を襲名し、初代デルゲ土司となったことを契機に、一族の政治勢力は急速に拡大した。初代土司は現在の徳格(デルゲ)県更慶(ゴンチェン)

鎮を一族の本拠に定め、高僧・唐東杰波とともに更慶に経堂を建て、高僧の名を取り「湯甲経堂」と命名した。第6代土司嘎馬松は巨費を投じ、経堂を基礎に更慶寺の建立を命じ、第8代土司根嘎彭錯の代に完成した⁹⁾。第7代土司(向巴彭錯)はモンゴル系軍部と同盟を結び、白利土司(現在の甘孜県西部地区)を制圧し領土を手に入れた。その功績によりグシハンより「デルゲ僧王」の称号を賜り、初代デルゲ法王を襲名した。その後、歴代土司が法王の位を兼ね、宗教面でも大きな指導力を発揮した。

17世紀から18世紀にかけてデルゲ土司の権勢は更に拡大し、徳格(デルゲ)、鄧柯、石渠(セルシュ)、白玉(ペユル)、同普、貢覚、達日、称多、甘孜(カンゼ)、新龍(ニャロン)等を支配下に置いた。土司は領土内の政治、経済、宗教、軍事、司法などを司り、小国の王として絶対的な権力を有していた¹⁰⁾。

ところが18世紀末頃から、一族の内紛が続く権勢にかげりが見え始めた。例えば第16代土司(徳嘎絨布)が23歳で夭逝した後、第17代(澤汪多吉仁真)が幼くして跡を継いだ。母親が摂政となったため僧や有力者の怒りを買って大騒動に発展した。土司はやがて支配地の一部を失い、勢力範囲は狭まっていった。また、土司の家臣たちが親漢派と親チベット派に分かれて権力闘争を繰り広げたことも土司弱体化の一因となった¹¹⁾。

その後も衰退は止まらず、20世紀に入ると土司制度に大きな転機が訪れた。1908年11月、川滇辺務大臣趙爾豊が軍を率いて徳格に到着し、翌年「改土帰流」制度を実施した。これは土司を廃止し流官(科挙試験に合格後、定期的に任地を替える官吏)を任命する制度である。しかし10年後の1918年、チベット政府が徳格の支配権を握ると、川辺特別行政区の役所を廃止し土司制度を復活させたが、実権はチベット政府が握った。1932年、形勢は逆転し四川軍が徳格を押さえた後、国民党は徳格県政府(県長:姜郁文)を設置した。国民党は土司の存続を認め、第21代土司尼麦澤汪鄧登を団務督察長に任命し、土司

制度を巧みに民衆統治に利用した。図3は孫明経(1911~1992, 後述)が1939年に撮影した第21代土司である。1950年6月, 中国人民解放軍が徳格に進軍した後も土司は存続したが, 民主改革を機に約500年にわたる土司制度は幕を閉じた¹²⁾。



図3 第21代デルゲ土司・澤汪鄧登(1939年)
Fig.3 Zewangdengdeng, the 21st tusi (headman) of Dege (1939)

長いデルゲ土司の歴史の中で黄金時代を築いたのは第12代テンパツェリン(登巴澤仁)である。彼は第6世デルゲ法王を兼ね、清朝より「得爾格忒安撫司職」の職名を賜り、印経院を開設しデルゲ土司の権力を見せつけた¹³⁾。

2.2 印経院の誕生

テンパツェリンはデルゲ一族の繁栄を築くためにチベット仏教の保護に力を尽くした。領内の民衆を束ねるには、為政者の徳を示し民衆の心をつかむことが何より肝要だからである。チベット仏教はニンマ、カギユ、サキヤ、ゲルク等諸派に分かれている。また、土着の民間信仰であるボン教も存在する。デルゲ土司は6代目がサキヤ派の更慶寺を建てたが、テンパツェリンは土司の宗教政策として、サキヤ派に限らずボン教及び各宗派の經典を保管する印経院を作ることを決意した。

印経院は更慶の小さな丘の上、かつての土司屋敷の南隣にある。開設地の選定に関して二つの言い伝えが残されている。一つはある日テンパツェリンが屋敷付近を散策していると、屋敷の南側からかすかに少年の誦経の声が聞こえてくるように感じられたこと。もう一つは金沙江西庫(現在の江達県)の叶絨という所に拉翁という者がいて、『称多』という經典の版木を土司に献じた。牛の背に載せ屋敷南側の丘に差しかかった折、突然牛が驚き背の版木を振り落としてしまったことに由来すると言われているが定かではない¹⁴⁾。

1729年、テンパツェリン52歳の時に印経院の建設が始まった。領内より1000人を超す職人と労働者が集められ、刻版と建築工事に従事した。1739年テンパツェリンは逝去したが、第13代司郎貢布及び第14代プンツォクテンパ(彭錯丹巴、テンパツェリンの次男)が事業を継承した。占いに基づき、「永恒長寿」「功德圓滿」「金剛」に縁のある名を持つ僧侶に基礎工事の祭事を行わせ、プンツォクテンパ自ら礎石を据えるほどの熱の入れようであった。印経院の建設工事に携わる者は土司に対する労役が免除される制度がとられ、500名を越す労働者が工事に参加した。印経院が竣工したのは第15代土司洛珠降錯の時であり、約30年の歳月を要した¹⁵⁾。土司の知恵と領民の汗が築き上げた印経院は、しだいに僧侶と信徒の間で神聖視されるようになっていった。

2.3 画版と書版

印経院が所蔵する版木数は約30万枚(諸説あるが、1999年の調査で273,591枚)であり、画版と書版に大別される¹⁶⁾。画版は1,053枚ある(旧画版376枚、1980年以降の新画版677枚)。旧画版はタンカ(156枚)、マンダラ(84枚)、ルンタ(136枚)の三種類である。代表的なタンカ画版は『羅漢図』(23幅)、『釈迦牟尼神変祈願図』(15幅)、『格薩爾王調伏妖魔鬼怪図』(8幅)等。新画版の多くは『伏蔵宝庫』の中の木刻図版であり、灌頂儀式に関連した各種仏

神、マンダラ、八祥瑞等の図案である¹⁷⁾。

書版は『カンギュル』（『甘珠爾』）、『テンギュル』（『丹珠爾』）、叢書、文集、総合、大蔵経単行本の6種類に分類される。チベット大蔵経はサンスクリットからチベット語に訳された仏典の一大叢書であり『カンギュル』と『テンギュル』に分けられる。『カンギュル』は「仏の教えの翻訳」の意で、經典そのものの集成であり「仏説部」と訳される。一方『テンギュル』は「注釈書の翻訳」の意で、注釈・論集の集成であり「論疏部」と訳される。デルゲで印刷された大蔵経は、ジャン版、永楽版、万暦版等と区別してデルゲ版大蔵経と呼ばれている¹⁸⁾。

書版の中で最も重要視されている大蔵経の構成を以下に示す¹⁹⁾。

『カンギュル』（『甘珠爾』）律経部（13函、3,944頁）、般若経部（21函、8,565頁）、華嚴経部（4函、1,568頁）、宝積経部（6函、1,757頁）、経部（32函、9,741頁）、続部（24函、計5,995頁）、旧続部（3函、956頁）、咒集（2函、計561頁）、無垢光経（2函、469頁）、司徒・曲吉久勒編『甘珠爾総目録』（1函、計171頁）。総計108函、1,108種、計33,707頁。

『テンギュル』（『丹珠爾』）賛頌部1函、計258頁。内明学（続経部、78函、23,143頁）、般若経部（94函、計27,363頁）、因明学（20函、計6,412頁）、声明学（4函、計1,287頁）、医方明学（5函、計1,771頁）、工巧明学及び修身部（1函、計277頁）、吞米・桑布扎等著文（4函、計1,345頁）、阿底峽等著雑文及び吉祥頌等（5函、計1,978頁）、徐欽・赤称仁欽編『丹珠爾総目録』（1函、503頁）。総計213函、計3,354種、約64,200頁。

叢書、文集、総合、大蔵経単行本については一部を以下に示す²⁰⁾。

叢書は『旧訳十万続部集』（26函、計419種、9,176頁）、『伏蔵宝庫』（70函、計2,820種、附3,385幅小画片、30,578頁）、『続部総集』（32函、計411種、10,821頁）等。文集は辛繞米沃且著『黒白花十万龍経』（2函、計409頁）、ソンツェン・ガムポ著

『嘛呢文集』（2函、652頁）、欧金林巴著『文集』（2函、計501頁）等。総合（個別の文献）はチベット文化に関連する五明学、史志類、顕乗撰述類、密教撰述類、短篇誦詞類等、約600種、計約6,800頁。大蔵経単行本は『般若波羅蜜多経十万頌』（12函、6,437頁）、『般若波羅蜜多経八千頌』（1函、518頁）、『大悲観音修法総集』（4函、1,382頁）等。

大蔵経の他に注目される書版としては、インドではすでに失われた『印度仏教源流』、『漢地仏教源流』、初期チベット医学の名著『居悉』（『四部医典』）等がある。最古の書版『般若波羅蜜多経八千頌』はデルゲのみが保管している²¹⁾。

書版の大半は墨による印刷だが、『甘珠爾』、『旧訳十万続部集』、『般若波羅蜜多経八千頌』、『丹珠爾』の賛頌部のみ朱で印刷される²²⁾。經典の版木は両面に刻字されており、両面印刷である。

3. 大蔵経と多田等観

3.1 大蔵経の開版

デルゲ印経院の建設は1729年に始まったが、それより少なくとも26年前（1703年以前）、第10代土司松吉登巴が『般若波羅蜜多経八千頌』等約1,500枚の版木を開版していた²³⁾。テンパツェリンが印経院を開いた目的の一つは、その版木の保管場所を確保することでもあった²⁴⁾。

デルゲ版大蔵経の開版を指示したのはテンパツェリンである。楊嘉銘によると、1729年7月6日、テンパツェリンは倫珠頂で『カンギュル』（『甘珠爾』）の開版準備を開始した。司徒・曲吉久勒を監修者に任命し、領内の書家、刻版工、画家、青年僧を招集し、刻版の技術を細かく伝授させた。7ヶ月余りの準備期間中、司徒・曲吉久勒、羅薩翁波、噶瑪巴珠、克追・扎西翁等が、『旁塘目録』、『秦浦目録』、『登迦目録』、ナルタン版『甘珠爾』、蔡巴『甘珠爾』の写本及びジャン・リタン版『甘珠爾』を収集し、着実に準備を進めていった²⁵⁾。

1730年2月3日に作業は正式に始まった。土司は誤りを防ぐために三重のチェックを命じた。書家は版木に書かれた文字を二度点検した後、校閲者が再度点検を行った。審査を通った版木は刻版工に回され、彫り終わった版木を校閲者が点検した。ミスが多ければ再度彫り直すこともあった。刻版は噶瑪巴珠と次白が責任者となり、筆写工60人、校閲者10人、そして400名余りの刻版工を総動員して、『カンギュル』（『甘珠爾』）は1734年に完成した²⁶⁾。

続いて『テンギュル』（『丹珠爾』）の開版が始まった。テンパツェリン逝去後、次男のプンツォクテンパが第14代土司となり『テンギュル』の事業を受け継いだ。彼は領内の鄧柯からサキヤ派の僧徐欽・赤称仁欽を招聘して監修者にすえ、古如扎西、阿多、赤称繞登の3名を刻版の責任者に命じた。計6種類の版本を収集し、徐欽・赤称仁欽等10人の校閲者と500余名の刻版工の努力が実を結び1742年無事に完成した²⁷⁾。歴代土司にとってチベット大蔵経の開版事業は、土司の名声と権威を高め領民の信頼を得るとともに仏への大きな功德となった。また、一族の事業収入を確保するという意味合いも込められていた。

3.2 多田等観とデルゲ版大蔵経

1923年1月か2月のある寒い夜、一人の日本人僧侶がダライ・ラマ13世の寝室で法王と別れを惜しんでいた。僧侶はダライ・ラマと枕を並べて、ラサ最後の夜を語り明かした²⁸⁾。僧侶の名は多田等観(1890-1967)、西本願寺から派遣されていた。多田は十年にも及んだ懐かしい歳月を思い返すと、万感胸に迫るものがあった。多田は法王とのドラマチックな出会いと別れ、そしてデルゲ版大蔵経請来のいきさつを、著書『チベット』『チベット滞在記』の中に書き残した。

多田がカリンボンでダライ・ラマ13世と出会ったのは1912年3月であった²⁹⁾。この時、多田は京都から持参していた「日本式の小さい厨子、ろうそく立て、花立てなどの一揃いの仏具」を献上した。一

方、ダライ・ラマは多田に「トゥプテン・ゲンツェン」という名とケンポが身に付ける僧衣や帽子を与えた。約二ヶ月の滞在中、多田はティトゥーという側近に日本の新聞から得たニュースを伝えていた。当時ダライ・ラマは清朝革命後の中国の動向を知りたがっていたからだ³⁰⁾。

『多田等観』によると、多田は1913年9月ラサに到着、10月ダライ・ラマに謁見、12月セラ寺に入ったとある³¹⁾。その後、非公式にダライ・ラマと面会する機会に恵まれた。多田はインドから送られてくる半年遅れの日本の新聞をチベット語に翻訳し、ダライ・ラマに国際情勢を伝える役目を担っていた。1914年夏には、多田はダライ・ラマから直接1週間にわたって『ラムリム・チェムモ』（『菩提道次第論(広本)』）の講義を受けることも許された³²⁾。外の世界を知る窓口となった日本人の弟子に、法王は全幅の信頼を寄せていたからだ。

多田のラサ滞在中、ダライ・ラマはラサ版大蔵経の開版に取り組んでいた。ブータン方面からヒマラヤ桜を取り寄せて版木とし、逐一原稿に目を通し字体や字形を指示するほどの熱の入れようであった。ラサ版の完成を待たずしてダライ・ラマは圓寂したが、遺言により多田はそれを譲り受けることができた³³⁾。その大蔵経のことを多田は著書『チベット』の中に記している。

ラサ版の大蔵経と世にいうのはその版木がラサにあるという意味であって、この十三世ダライ・ラマの刊行された大蔵経のことである。チベット人のうちには、これを新しい大蔵経と呼ぶ人もある。ポタラ宮殿の麓にパルカンと呼ぶ建物ができて、その版木が積み入れられてある。版木は非常に固く、二尺五寸の長さ、八、九寸の幅があり、厚みもかなりあるものである。この大蔵経の新版刊行のことだけを取り上げてみても、十三世ダライ・ラマの仏教に対する蘊蓄、人並優れたものであった。³⁴⁾

こうして多田はセラ寺の恵まれた環境のもとで約十年間修行に専念し、チベット仏教の研究に明け暮れることができた。ある日、ダライ・ラマに帰国する旨を告げると強く慰留されたが、多田の決意は固かった。法王は多田との親交の印に、稀覯本や各種文献を惜しげもなく彼に贈った。その外、当時門外不出とされていたデルゲ版大蔵経も日本へ請来することとなった³⁵⁾。『多田等観』には、1922年10月10日(西暦1922年12月8日)「帰国に先立ち、ダライラマ十三世より、叢書二十五帙下賜」と記されている³⁶⁾。チベット人の学者から反対の声が相次いだ、ダライ・ラマは次のような言葉を述べた³⁷⁾。

仏教を学ばない者になら猿に剃刀を持たせるようなもので危険でもあるし、法の冒瀆にもなるが、仏教を体得した者にこれらの文献を与えるのは、一向に差し支えないことだし、仏法もさらに広まるであろう。³⁸⁾

国外への持ち出しに異を唱えていた学者たちはその後、貴重な文献を多田に贈り一件落着した。デルゲ版がチベット国外に請来されたのはこれが初めてであった。現在、その大蔵経は東北大学図書館が所蔵しており、チベット学・仏教学研究の発展に寄与した世界的にも極めて貴重な文献として認められている。

多田は著書『チベット』の中で、デルゲ版のことを次のように評している³⁹⁾。

デルゲ版は正確な文典的校訂を経てある点に特徴がある。また文字の印刷が極めて鮮明である。これは版工に優秀なものが居たためらしく、開版後願主デルゲ王は、他でこのやうな美しい出版をなすことを恐れて、版工の右腕を切斷したと云う傳説がある程である。然し、ナルタン版が國教の黄帽派の手に成つたのに反し、デルゲ版はサキャ派の末派の學僧が大成したた

めに、宗派的感情によって一地方に存在し、中央に流布するを得なかつた。一九二〇年已來、西藏の邊疆に政治問題が起り、支那西藏兩軍の間に戦亂が醸し出されるや、デルゲの地は屢々その渦中に在り、竟に藏經の版木は兵火のため焼失するに至つた。これよりも先に、リタン、チャムドの諸版もまた兵火に焼失されるの不幸を見たのである。

デルゲの版木が戦亂で消失したという記述は事実誤認である。多田は実際にデルゲの地を訪れて確認したわけではなく、これは当時の噂に頼った記述であろう。1958年多田は「パルカンについて」という文章の中で、「デルゲ版大蔵経で有名なデルゲ・ゴンチェン Sde-dgedgon-chen にも各種の版木を藏しているが、宗派の相違から中央のラッサ方面ではあまり知られていない版も多く、入手も容易ではない」と書いている⁴⁰⁾。多田が請来したデルゲ版の品質が高いことは事実であるが、徳格では現在もその高品質が維持されているとは言い難い⁴¹⁾。また当時の版木の一部が失われたことも事実である。

4. 孫明経と1939年のデルゲ印經院

4.1 孫明経の映画と写真

2003年山東画報出版社より『1939年：走進西康』という写真集が出版された。写真はいずれも西康省成立直後の1939年夏から秋に孫明経が撮影したものであり、その中で徳格及び印經院に関する写真は以下の9枚である。

- (1) 第21代デルゲ土司澤汪鄧登 196頁
- (2) 印經院の幹部僧 207頁
- (3) 印經院での印刷風景① 208頁
- (4) 印經院での印刷風景② 209頁
- (5) 製紙作業を行う少年 210頁
- (6) 徳格県立小学校の教師と生徒 211頁
- (7) 徳格県立小学校に掲げたスローガン213頁

(8) 徳格の実力者が開いた小学校 214頁

(9) 徳格県県長 范昌元 216頁

1939年1月、東チベットに西康省が誕生した。康定が省都となり、劉文輝(1894～1976)が省主席に就任した。その年の夏、劉文輝は川康科学考察団を西康省に招き、誕生間もない省内の調査と撮影を依頼した。考察団の中で映像撮影を担当したのは当時金陵大学教員の孫明経であった。彼は1927年から34年まで金陵大学で理学と工学を学んだ後、母校の教員となり魏学仁理学院長の助手を務めた。専攻はドキュメンタリー映画であり、1936年理学院の中に電影部が設けられ映画撮影の教育がスタートした。その後、戦況の激化に伴い、大学は南京から成都へ、理学院は重慶への移転を余儀なくされた。重慶では1938年に電化教育専修科が開かれ四年制に改組された後、成都へ移転した。専修科は孫明経が責任者となり、「撮影初歩」「教学電影」「攝影学」「電影攝制」の講義を担当した。また、妻の呂錦瑗も「電影文献」「電影鑑賞」を講じた⁴²⁾。

孫明経は撮影技術を講義するだけではなく、自らドキュメンタリー映画制作に携わりカメラを回した。彼が直接制作した映画は49本、制作に関わった映画は92本を数えている⁴³⁾。1939年夏から五ヶ月間、孫明経は西康省各地で撮影を行い、同時に約800枚の写真を撮り、約100枚のレポートを書いた。映像は後に「西康シリーズ」として8本の短篇映画に編集された(『西康一瞥』『雅安辺茶』『川康道上』『省会康定』『金礦鉄礦』『草原風光』『康人生活』『喇嘛生活』)。彼は映画人生を順調に歩んでいたが、1957年突如として反右派闘争に巻き込まれ、「右派」と認定されてしまった。教壇を追われカメラを奪われ、強制労働と政治教育への従事が課せられた。その後、文化大革命が勃発すると彼が残した各種映画や写真のフィルムと資料はことごとく紅衛兵が持ち去ってしまった。1979年に名誉回復がなされたが、フィルムが戻ってくることはなかった。そして1992年に孫明経は81歳の生涯を終えた。



図4 孫明経(中央)の生涯と作品を紹介した中国中央電視台のドキュメンタリー番組「世紀長鏡頭」

Fig.4 The CCTV documentary on the life and works of Sun Mingjing (in the center), titled “The 20th Century through a Telescopic Lens”

逝去から10年後の2002年、行方不明となったフィルムと写真の一部が発見された。『1939年：走進西康』は川康科学考察団が残した成果の一部であり、映画フィルムは再構成されて、中国中央電視台が2004年9月に『世紀長鏡頭』(図4)と題する番組として放映した⁴⁴⁾。番組構成は次の通り。

- (1) 「孫明経：帶攝影機的旅人」(上中下)2004年9月2日－4日放映
- (2) 「紅顏」(上下)9月5日・6日放映
- (3) 「東吳往事」9月7日放映
- (4) 「一個消失的省份」9月8日放映
- (5) 「水電人家」9月9日放映
- (6) 「塵縁」9月10日放映
- (7) 「甘孜之恋」9月11日放映
- (8) 「川康茶馬古道」9月12日放映
- (9) 「鍋庄伝奇」9月13日放映

この内、川康科学考察団と関係があると思われるのは「一個消失的省份」「甘孜之恋」「川康茶馬古道」「鍋庄伝奇」である。東チベットの映像が一部であれ保管されていたことは不幸中の幸であった。考察団の調査映像は映画が主であり、写真は参考資料に過ぎなかった。デルゲ印経院の写真が残されているということは、同時に動画も撮影されたと考えられるが、『世紀長鏡頭』にはその場面が登場しない。現存するか否かを確認する術はないが、もし存在するのであれば、研究資料として公開されることを切に望む。

4.2 1939年の徳格と印経院

図5は幹部僧の写真である。当時印経院の管理は、テンパツェリンと司徒・曲吉久勒(八邦寺活仏)が定めた『印経院管理規則』に依っていた。運営組織は3人の僧侶によって構成されてきた。最高責任者は院長(巴本)、総務管家(巴令)、秘書(巴中)。任期は3年であるが、優秀な人材と認められた場合は再任も可能である。更慶(ゴンチェン)寺のケンポが学問人格に秀でた僧を選び土司に推薦した後、管家(涅巴)会議での審議を経て、土司が任命する仕組みである。院長の役割は経営と人事全般である。管家の職務は財務、印刷の品質管理、材料の手配、鍵の管理、給与の支給など多岐にわたった。秘書は帳簿、予算、契約、渉外などを担当した⁴⁵⁾。写真の僧は当時の三役である可能性が高い。



図5 デルゲ印経院の幹部僧二人(1939年)
Fig.5 Two high-ranking monks of Dege Sutra-Printing Academy (1939)

經典の購入者はデルゲ土司と直接契約を結ぶ必要がある。契約成立後、印刷にとりかかり、完成品の輸送費用は購入者側の負担となる。インド、ネパール、ブータン、シッキム等国外からの注文は、八邦寺が仲介者となり土司と契約することになっていた。デルゲ土司にとって印経院の収入は一族の繁栄を支える財源であった。歴代土司は印経院の純利益から三分の一にあたる額(約100~200秤銀)を手に入れていた。1932年、国民党が徳格に県政府を設置した後は、第21代土司澤汪鄧登が県政府へ毎年銀6秤の税を納めるようになった⁴⁶⁾。印刷期間はチベット暦3月15日から9月20日まで、『テングル』25セット、『カンギュル』は20セット、他の文献は約10セットに制限されていた⁴⁷⁾。

図6と図7は經典の印刷風景である。1939年より以前の写真は存在が確認されていない。印刷工の数は印刷量が多いときは約200人から300人、少ないときは100人前後である。印刷作業は三人一組(版木係、墨係、刷り係)で行う。一日のノルマを超えると金銭や物品で手当が支払われる。版木係は一度に版木を10枚搬出し、印刷完了後、洗浄し乾燥させた後ヤクのバターを塗って倉庫へ返却する⁴⁸⁾。印刷は昔も今も男の仕事である。印経院は印刷工房であるとともに、大蔵経など大事な版木の保管庫でもある。火災発生を避けるため、現在も電気設備はない。



図6 經典を印刷する印刷工(1939年)
Fig.6 Printers printing Buddhist sutras (1939)



図7 経典を印刷する印刷工(1939年)
Fig.7 Printers printing Buddhist sutras (1939)



図8 伝統的な工法で紙すきを行う少年(1939年)
Fig.8 A boy manufacturing paper, using a traditional papermaking technique (1939)

図8は川で紙すきを行う少年である。歴代院長は領内の農家約100戸と契約し、土司への役務として年間1,700枚の紙を納めさせていた。その上、60歳洋相当の茶葉や物品を与える代わりに1歳洋当たり50枚の納品を課していた。紙の原料はアジョルジョ(狼毒)という植物の根であり、毒性を含むため虫や鼠に喰われにくい上、湿気にも強いという特徴がある。アジョルジョ及び徳格の伝統的な製紙技法については山中勝次の論稿に詳しく述べられている⁴⁹⁾

この伝統的な紙すきは1950年頃まで行われていたが、中華人民共和国の時代に印経院が約20年間閉鎖されたこともあり、紙すき農家は大幅に戸数を減らしてしまった。1980年代以降、製紙業者(四川省雅安県)から買い付けているが、雅安の紙は印刷が不鮮明な上、目が疲れやすいと僧侶の不評を買った。2000年にアメリカのとある財団が印経院の現状を憂えて、伝統的な紙すきを復活させるための助成金提供を申し出た。このことが契機となり、印経院ではチベット式製紙法が再開し始めた⁵⁰⁾。

図9は徳格県長・范昌元である。『徳格県志』によれば、彼は白玉(ペユル)県長・爐霍(ダンゴ)県長を経て、1937年4月から48年7月まで徳格県長を務めた。彼の後任である管履絲は1951年1月まで民国政府最後の徳格県長を務めた⁵¹⁾。



図9 徳格県長・范昌元
Fig.9 Fan Changyuan, Chief Executive of Dege County Government (1939)

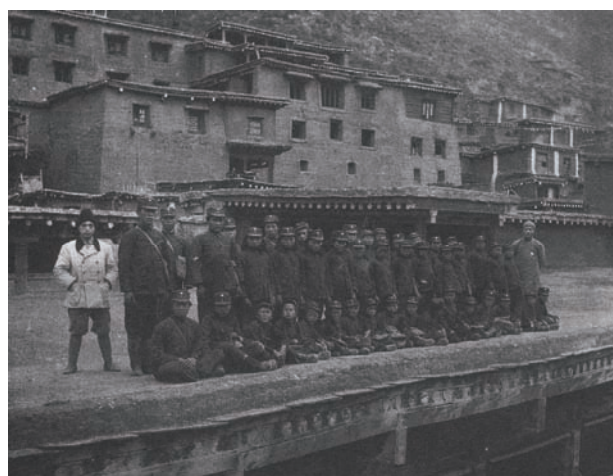


図10 デルゲ県立小学校の教師と制服姿の生徒(1939年)
Fig.10 Teachers and pupils in school uniform of Dege Prefectural Elementary School (1939)

図10は1937年秋に正式開校した徳格県立小学校(4年制)である(1935年12月にすでに開校されていたが、有力者の師弟のみに入学が許されていた)。県長の范昌元が設立に尽力し教育に情熱と資金を投じた。同時に麦宿と玉隆にも2年制の短期小学校を開いた⁵²⁾。校舎の扉には「漢話康話都要懂 漢文康文都要學」(漢語カム語をともに理解し、漢語カム語をともに学ぼう)のスローガンが貼られていた。「康話」はチベット語のカム方言を指す。中国人は積極的にカム方言を学び、チベット人は漢語を学ぼうという意味である。その後、1939年3月に西康省立小学へ、1943年に徳格県国立小学へと名称を変更した。徳格で漢語教育を開始したのは趙爾豊である。彼は1910年に徳格县城、龔埡、麦宿に官話小学校を開き漢語による教育を実施した。

5. 徳格における統一戦線活動

5.1 先遣部隊と徳格

現在中国共産党は土司制度を東チベットの「封建的農奴社会と政教一致による支配を支えた悪」と見なしている⁵³⁾。党は建国後のチベット政策の中で、デルゲ土司と印経院を早急に党の管理下へ移す措置をとらなかった。結果として土司制度は1956年まで存続し、印経院は1958年8月までデルゲ土司及び院長(巴本)が実権を握っていた。建国直後、中国共産党のチベット政策は、土司制度の解体よりもチベットの早期「解放」と支配を優先課題に掲げていたからである。

『十八軍先遣偵察科進蔵紀実』によると、北路先遣部隊(18軍52師)が康定を経て甘孜(カンゼ)を離れたのは1950年6月18日であった。この時、徳格へ向かう先遣隊を指揮していたのは薛和処長、李奮科長、高啓祥副科長であり、雀児山を越えて徳格に到着したのは6月26日であった。彼らはかつて国民党政府が開設した徳格小学校に部隊本部を置いた⁵⁴⁾。



図11 デルゲでチベット人と交歓会を開く第18軍兵士たち(1950年)

Fig.11 The 18th troop soldiers holding a social gathering with Tibetans in Dege (1950)

先遣部隊は徳格での前線支援を円滑に進める目的で、7月1日の建党記念日に交歓会を開いた(図11)。軍参謀の王貴は趙桂と二人で延安の秧歌「兄妹開荒」を歌い踊り、李奮科長は山西南路地方劇の歌を披露した。同時に中国共産党が推し進める民族政策・宗教政策を宣伝し、チベット進軍への協力を要請した⁵⁵⁾。甘孜に残った部隊は7月10日にラサへ向けて白利寺を出発するゲダ活仏護衛の準備に追われていた。ゲダ活仏の共産党への協力姿勢は、先遣部隊にとって最大の収穫であった。

徳格の西約20kmの所に金沙江という川が流れている。金沙江を挟む東側はチベット政府の支配地であるため、解放軍にとって徳格はチベット進軍を実施するにあたって最も重要な前線基地であった。先遣部隊は夏仲遠を軍事代表に任命し、部隊が金沙江を渡るための前線支援に従事させた⁵⁶⁾。軍事行動を円滑に進めるには、現地のチベット人有力者を味方につける必要があった。先遣部隊が統一戦線活動の対象に選んだのはゲダ活仏と夏克刀登である。二人の共通点は、1936年長征途上の紅軍と朱徳を援助し、食糧の確保、ボバ人民共和国政府の成立に尽力したことである。今回のチベット進軍にあたって、

ゲダ活仏は朱徳との友誼を重んじ、チベット「解放」の使者として、中国共産党に「全面的に」協力した。この時のゲダ活仏と党の関係は他稿にて論じた⁵⁷⁾。

5.2 夏克刀登と降央伯姆

夏克刀登(1900～1959)はデルゲ土司配下の首領の一人である。1936年紅軍がボバ人民共和国の成立を主導した際、夏克刀登は共和国の軍部を統括しており、共産党にとっては頼りになる人物であった。先遣部隊は甘孜・徳格地方の実力者として夏克刀登を高く評価していた。彼はあくまでもデルゲ土司配下の首領の一人に過ぎないが、1940年代における地域の統率力と経済力において土司を凌ぐ勢いを持っていた。1950年3月、康定が解放されると、康定軍事管制委員会は夏克刀登と邦達多吉(巴塘 [パタン] の豪商)を康定に呼び寄せ副主任に命じた⁵⁸⁾。

中国共産党は統一戦線活動を更に進めて、1950年11月に西康省チベット族自治区政府が成立した際、西康省副省長の夏克刀登を自治区政府副主席に、降央伯姆(1913～1988)を自治区政府委員に就任させた⁵⁹⁾。降央伯姆は第22代土司(摂政)を務めた女性である。二人の間には十年來の確執があり、共産党にとって徳格を統治する上で両者の関係は頭痛の種であった。

降央伯姆は第21代土司澤汪鄧登の妻であったが、夫が1942年に病死した後、土司の後継者を巡って土司派と夏克刀登派の間で激しい抗争が繰り広げられた。本来であれば第21代土司の息子烏金夏が第22代を襲名するはずであるが、5歳に満たないため、土司派は土司夫人である降央伯姆もしくは八邦寺の司徒活仏を摂政に立てる案をまとめた。一方、夏克刀登派は昂降白仁青の息子噶絨翁堆(チベット軍の代本)が降央伯姆と再婚後、土司に就任することを主張した。両者相譲らぬ睨み合いが続いたため、国民党と徳格県政府の仲介により、烏金夏が成長するまで降央伯姆が土司の摂政となることに決まった。両者の確執はその後も続き、1950年5月互いに挙兵の

準備を行い一触即発の状態にあった。その直後、降央伯姆は共産党軍が甘孜から徳格に向かっていていることを知り、矛を収めて兵を退散させた⁶⁰⁾。

共産党が夏克刀登を重用すると両者の怨念が強まる恐れがある。そこで、先遣部隊の軍事代表夏仲遠と方剛は、統一戦線の対象を降央伯姆に絞り込み、土司の権威を保ちつつ地方政府の要職を歴任させることで土司の体面を重んじその力を巧みに利用した。1951年に彼女はチャムド地区解放委員会副主任となり、チベットへの物資輸送の指揮も行った。続いて1952年9月、西康省チベット自治区参観団の副団長として北京を訪問し国慶節の式典に参加した。北京では毛沢東と李維漢(中央統一戦線工作部部長)、途中重慶では賀龍(西南軍政委員会副主席)との面会を準備して、共産党を支持する「愛国土司」の役割を巧みに演じさせることに成功した⁶¹⁾。

6. 建国後のデルゲ印経院

6.1 共産党政権の誕生

中華人民共和国が誕生した1949年当時、徳格では第22代土司(摂政)降央伯姆を中心とした土司制度が政治と宗教そして経済を動かしていた。『徳格県志』によれば、1956年から58年を中心とした民主改革により土司や首領による統治は終了したが、最後の土司(摂政)である降央伯姆は1959年までその職に就いていた。同じく1949年当時、国民党徳格県党部(書記長：彭光鑄、任期不明)と徳格県政府(県長：管履絲、任期：1948年7月～1951年1月)が存在したが、土司や配下の首領、有力寺院の高僧と比べれば、国民党が掌握していた権力と財力は極めて小さなものにすぎなかった⁶²⁾。

一方、共産党は1951年1月、党康定地区委員会が謝椿人、毛頭儒、王承天を中心とする工作組を徳格に派遣し、国民党から政権を移管させた。そして5月27日先ず徳格県人民政府を成立させ、11月徳格軍事代表に任命された李森が党組織構築の準備を進

め、約1年後の1952年10月5日、党徳格県工作委員会（書記：李森）が誕生した⁶³。ただし共産党は徳格では政治・経済共に勢力基盤が脆弱なこともあり、直ちに土司制度の解体を命じるのではなく、土司の支配力を弱めつつも支配制度を存続させることで、共産党への批判を抑え社会の混乱を回避する選択を行った。

李森書記は1940年代に中隊長、参謀、大隊指導員を務めた経歴を持つ軍人でもある⁶⁴。彼の書記在任期間中に（1952年10月～54年11月）、徳格に解放軍が駐留することはなかった。ラサへの派兵と康蔵公路（雅安ラサ間）建設を優先させるという中央の事情と、デルゲ土司の現有兵力を勘案した地方の事情が背景にあったからである。徳格に人民武装部兵役局が設置され、新兵の登録が行われたのは、民主改革が始まった1956年であった⁶⁵。歴代土司は常に領内に差兵約10,000人、土兵約5,000人、僧兵数千人を抱えていたと言われている。デルゲ土司はデルゲ法王を兼ねており、領内の僧院に対しても絶大なる支配力を有していたため、有事の際、各僧院から僧兵を徴集する権限を持っていた。建国当初の時期、仲薩寺、更沙寺、八邦寺、竹慶寺、協慶寺の五寺は約4,000から6,000の僧兵を抱え約1,400丁余りの銃を所持していた⁶⁶。政治、経済、宗教、軍事等多方面の権力を一手に握っていた土司制度を解体したのは、党委員会成立から4年後の1956年であり、旧土司組織を共産党支配体制に組み入れるには更に時間を要した。

6.2 民主改革と印経院閉鎖

印経院はデルゲ土司の権勢を示す象徴であり、土司一族の貴重な収入源でもあった。建国後、土司支配から共産党支配へ移行するなかで、印経院の今後の運営方法を議論することは共産党にとって緊急の課題であった。土司の地域における尊厳と信徒の宗教心を考えれば、印経院の早急な改革は共産党支配の基盤整備を進めて行く上で不利に働くことは間違

いなかった。そこで共産党が出した結論は、更慶寺から選ばれた僧侶が務める院長（巴本）に当面管理を委ねることであった⁶⁷。

ただし院長による運営が続いたのは1958年8月までであり、その後、印経院は經典の印刷と販売を停止せざるを得ない事態に追い込まれていった⁶⁸。民主改革の進展がデルゲ土司の支配権を剥奪し、共産党政権と土司勢力下の僧侶や領民の間で激しい武闘が繰り広げられたからである。民主改革とはチベット人居住地区を対象に、共産党が強硬に進めた特権剥奪の闘争であった。具体的には土司や首領、寺院などが持っていた政治、経済、宗教、司法などの権限を共産党と人民政府に移管することであった。

共産党康定地区委員会の指示により徳格に民主改革の旗が掲げられたのは1956年1月であった。更慶の町で共産党を支持する農民や遊牧民約500人が集められ、民主改革の目的と意義を宣伝する集会が開かれ、民主改革の推進が確認された⁶⁹。翌月（2月）党徳格県工作委員会は民主改革工作隊を組織して各村々へ派遣し、農民たちへの啓蒙活動を開始した⁷⁰。ところが共産党の強硬姿勢は各地で抵抗にあり、多くの犠牲者を伴う武闘へと発展していった。首領たちは農民兵を総動員して銃刀や弓矢、槍を用いた抵抗運動を指揮した。両者が話し合いで折り合いをつけることは叶わず、闘争と抵抗は鄧柯地区を除く全県で日々激しさを増していった。民主改革工作隊員の殺害、共産党支援者への妨害、混乱に乗じた食糧の強奪、僧兵たちの武闘参加等により事態は深刻化していった⁷¹。徳格の党本部は徳格県平叛指揮部を組織し、重慶と成都から解放軍の応援を要請し、地元の公安、民兵、武装工作隊と協力して叛乱の鎮圧にあたった⁷²。1960年最後まで抵抗した武闘派の多くは金沙江を渡りチベット自治区内へ移り、民主改革は終結した。双方の犠牲者数は不明だが、解放軍の投入は武装闘争の激しさと犠牲の大きさを何よりも物語っている。

党徳格県初代書記李森は退任後、甘孜州文教処処

長を務めていたが、1958年8月、徳格県の四反運動（叛乱、違法、特権、搾取に反対する運動）を援助する目的で康定から徳格に赴任した。しかし翌年2月竹慶寺で発生した反民主改革の武闘により死去した⁷³⁾。

このような混乱した状況下で印経院が正常な活動を維持することは無理であった。1952年以後、最後のデルゲ土司（摂政）降央伯姆は共産党の統一戦線活動により「愛国土司」の道を歩み1958年8月、印経院は民主改革の進展により活動停止に追い込まれた。共産党は大きな犠牲を払って民主改革という「成果」を手にした。印経院はこうして土司の手から奪われたのである。

6.3 診療所開設と役割

民主改革により共産党は土司制度を解体し、首領の持つ財産や特権を奪い、寺院の活動に制限を加えた。共産党は徳格での政権基盤を固めることには成功したが、強権的な政権への不信感を民衆に植え付ける結果となった。土司という為政者が印経院を支配してきた以上、共産党は今度は徳格県委員会の書記が印経院を管理するのが当然であると考えた。動乱の最中に印経院を閉鎖した後、共産党徳格県工作委員会は統一戦線工作部（1958年成立）と宣伝部（1952年成立）に、印経院の建物、所蔵する書版と画版、仏像等文化遺産の全面的な調査を命じた⁷⁴⁾。騒乱が続く中、チベット仏教徒に対して印経院を保護する姿勢を見せることが目的であった。もう一つの目的は、印経院を舞台にした土司と寺院による支配構造と宗教政策を把握し関係資料を入手することであった。

調査終了後、当時の党工作委員会第一書記のケンラブ（欽繞）は印経院の版木を封印し、1959年1月印経院の内部に5人の医師からなるチベット医学診療所を開設した。5人の医師には医療行為の他に印経院の建物と版木を管理する任務も与えられた⁷⁵⁾。漢人の公安や兵士も、まさか医療機関を焼き討ちにすることはあるまいと考えたからである。こうしてケ

ンラブ書記の判断が功を奏し、印経院は封印されることになった。

印経院が経典の印刷販売を停止したことは、徳格のみならず内外のチベット圏全域の宗教活動に影響を及ぼすこととなった。診療所の開設は、印経院とチベット医学の密接な関係を利用した共産党の巧みな戦術であった。印経院には『達摩著・極密文書』（達摩秘本）、『医学四論』、『藍寶石』、『宇妥・云登棍波十八分支』、『百万舍利』、『医学滙集』、『貴重薬物補充』、『火麻仁』等、多数のチベット医学関係書が収められている⁷⁶⁾。チベット仏教の僧侶の中には医学や薬草学に関する豊富な知識を持つ者が一定数存在し、実際に医療行為を行う者もいる。長年印経院の管理を任されてきた僧は更慶寺の所属であり、更慶寺の前身は唐東杰波が建てた湯甲経堂である。唐東杰波はチベット医学の知識を持つ僧であり、徳格で修行中、「成道白色丸」という胃薬を伝授し徳格における医学の礎を築いたことで有名である⁷⁷⁾。また、印経院を創設したテンパ・ツェリン自身も叔父の四郎彭錯から医学の知識を学んだことが知られている⁷⁸⁾。印経院とチベット医学という絶妙の組み合わせは、共産党の宗教抑圧政策を覆い隠す上で有効であり、民衆の共産党への不信感を和らげる効果もあった。

7. 文化大革命と印経院

7.1 「破四旧」と印経院

印経院がたどってきた約280年の歴史の中で、筆者が最も関心を寄せるのは文化大革命時期である。『徳格県志』によれば、この町に文化大革命の狼煙が上がったのは1966年7月15日である。「大事記」には次のように記されている⁷⁹⁾。

7月15日 中国共産党デルゲ県委員会が開いた拡大会議で、ヤンリンドジェが「文化大革命」運動の展開に関する文献を伝達し、県内すべて

の幹部や群衆に政治を重視し毛沢東思想を活用し、「文化大革命」運動に身を投じるよう呼びかけた。

10月 「十六条」を徹底して宣伝し、「破四旧、立新四」運動を展開したことにより、一部の寺院建築や文化財が損害を被った。

ヤンリンドジェは1966年7月当時、党徳格県委員会の書記であった⁸⁰⁾。8月18日、北京では軍服姿の毛沢東が天安門の樓閣に立ち、全国から派遣された百万人とも言われる紅衛兵や民衆に接見した。この時、樓上にいた林彪は実権派と學術權威の打倒、そして「四旧」の打破を呼びかけた。その二ヶ月後の10月、徳格の町を「旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣を打ち壊す」という「破四旧」のスローガンが埋め尽くした。1966年末から67年にかけて、デルゲ土司とつながりの強かった更慶寺、八邦寺、仲薩寺などの名刹はことごとく破壊され、貴重な經典や仏像が略奪された。八邦寺では、六万枚余りの版木が無残にも焼き払われてしまった⁸¹⁾。

ところがデルゲ印經院は土司や寺院との密接な関係、版木に刻まれた膨大な知識、學術的価値の高さから見て、「破四旧」の格好の標的であったはずだが、結果として建物も版木も壁画も軽い被害を受けるに留まった。いったい誰がどのようにして印經院を守ったのであろうか。

7.2 幹部と医師

疑問を解く手掛かりはいくつかある。八巻佳子(チベット現代史研究家)は1996年に「チベット語の興亡と出版物の現状」と題する文章の中で、次のように記している⁸²⁾。

以上は人民共和国成立後の出版状況で、凶書の形態は洋装本がほとんどであるが、なかには古来からの版木印刷のものもある。現在、ラサの寺院内でも手刷りが行われている。特に有名

なのは四川省甘孜自治州の徳格印經院で一八世紀に建立、現在二一七〇〇〇個の版木が収蔵され、大蔵經、医学、曆算、文法、声明にわたる世界的にも貴重な文献がある。文革時にチベット族最高幹部が断固として防護したため無事に今日に伝えられたと聞いている。

ここで言う「チベット族最高幹部」が誰なのか、また八巻がどの資料に依拠したのかは不明である。文革期の印經院に関する情報が極めて乏しい中、1996年に発表した八巻の記述は注目に値する。

もう一つの手掛かりは堀江義人「チベット語大蔵經、文革逃れ10万枚 中国四川省・徳格印經院」である。新聞記者の堀江は2001年8月にデルゲ印經院を取材し、文革期の状況を報じた⁸³⁾。

中国の長江上流・金沙江のほとりにチベット文化の宝庫といわれる徳格印經院(デルゲ・バルコン)がある。チベット仏教の經典を集めた大蔵經の古い版木、壁画、塑像など貴重な文物が、文化大革命の破壊を奇跡的に逃れて大量に保存されている。

チベット仏教への厚い信仰が文革の被害を最小限に食い止めた。印經院の医師は狂気を装って裸で門前をうろつき、紅衛兵を寄せ付けなかった。県党書記は批判を浴びながらも文物保護の証明書を振りかざし、体を張って守ったという。

堀江の取材では、医師と書記による懸命の努力が印經院を守ったことがわかる。堀江は後に著書『天梯のくに チベットは今』の中で、「ヤンリンドジ書記は紅衛兵が乱入しようとした時、文物保護の証明書を振りかざし、体を張って阻止した」と書いている。医師は1959年印經院内に開設された診療所のチベット人医師であり、著書でその医師のことに触れている⁸⁴⁾。

文革が始まり、だれもいなくなった印経院に一人残り、気がふれた風を装った。いつも素っ裸で、院の玄関にいたので、紅衛兵は気味悪がって踏み込もうとしなかったという。

近所の人たちも毎日、バター茶やツァンパ、肉を届けて支えた。こうして彼は数年を過ごし、文革が終わろうとする時に亡くなった。青海省ジェクンド(玉樹)出身というだけで、名前はわからない。

八巻が言う「チベット族最高幹部」とは、堀江の「ヤンリンドジ書記」を指すと考えていいだろう。文革勃発時、徳格で書記を務めたのはチベット人のヤンリンドジェである(1963年12月～1967年1月)⁸⁵⁾。1967年1月、造反派が徳格の支配権を握った結果、ヤンリンドジェは身柄を拘束された。3年後の1970年5月、中国共産党徳格県革命核心領導小組が実権を握り、軍人の劉振亜(1970年6月～8月)、許湘池(1970年8月～1971年6月)が組長となり、徳格は混乱の様相を色濃くしていった⁸⁶⁾。

7.3 現地調査

2003年8月、筆者は初めて徳格を訪れた。県の中心地である更慶(ゴンチェン)の町は、15分も歩けば一回りできるほどの大きさである。谷あいを開けた狭い町は、ホテルや商業施設の建設ラッシュであり、木造の伝統的な民家はほぼ姿を消し、古都の風情に似つかわしくない鉄筋コンクリートの建物ばかりが目立っていた。徳格にまで押し寄せた開発の波は、民主改革と文革が残した動乱の痕跡を町から消し去っていたが、当時を知る人々の記憶は失われていなかった。私が徳格を訪問した理由は文革初期における印経院の状況を知る手掛かりをつかむことであり、滞在中に以下の内容で聞き取り調査を行った。

【調査日時】

2003年8月25日・26日

【質問事項】

- (1) 印経院を「破四旧」から守った人物は誰か
- (2) 紅衛兵は版木を略奪したのか

【対象者】

50歳代前後のチベット人

質問(1)は八巻「チベット族の最高幹部」、堀江「党書記」「医師」という記述を念頭に置いて行った。対象者を50歳代に絞ったのは、それ以下の若い年代では当時の政治状況を把握しているとは言い難く、60歳代以上の者は漢語の理解力に著しく欠けることが多いからである。チベット人に限定した理由は、漢人は文革終結後に商売を目的に他の地域から移住してきた者が大半を占めるからである。合計35名に質問を行なったが、回答が得られたのは15名前後であった。結果を以下に示す。

【質問(1)への回答】

- 毛沢東 6人
- 中国共産党 5人
- チベット人医師 3人
- 更慶寺の僧侶 3人
- ヤンリンドジェ書記 3人
- 不明・無回答 15人

【質問(2)】

- 版木の略奪を見た 7人
- 版木の焼却を見た 3人
- 不明・無回答 25人

予想通り調査は難航した。理由は彼らの漢語能力の低さ、加えて「文化大革命」や「中国共産党」という言葉への過敏な反応である。質問(1)で「毛沢東」「中国共産党」と回答した11人に共通するのは、「政治を語りたくない」「面倒なトラブルに巻き込まれたくない」という思いであろう。「毛沢東や中国共産党がチベット文化の誇りである印経院の価値を理解し、わざわざ破壊の対象から除外した」というニュアンスはほとんど感じられなかった。このような「模範的な」回答は自己保身のあらわれであるが、同時に血なまぐさい時代と政治への痛烈な批判

にも感じられた。あれから四十年の時を経た今も、彼らの文革へのわだかまりは解けていない。ヤンリンドジェと答えた3人に対しては、「彼がどのような方法で印経院を守ったのか」という質問を行ったが返答はなかった。

質問(2)については、「紅衛兵が略奪した」という回答が3人、「略奪者の詳細は不明」が4人であった。版木が焼却される場面を見たという回答は3人あったが、内2人は記憶が不鮮明であった。

7.4 ヤンリンドジェと周恩来

これまでヤンリンドジェと印経院の関係は断片的な情報しか得られなかったが、『四川蔵学研究(五)』(四川人民出版社, 2002年)に、ヤンリンドジェの文革体験談が掲載されたことにより、具体的な状況の一部が明らかになった(澤仁鄧珠「灑向雪域都是情——訪四川省政協原副主席楊嶺多吉」)。

ヤンリンドジェが徳格県党委員会書記に就任したのは1963年12月であった。書記在任中に文化大革命が勃発、1967年1月造反派が台頭し党委員会から指導権を奪い取るという事態が発生した。ヤンリンドジェは即座に書記を解任され、「資本主義の道を歩む実権派」(「走資派」)という罪名をかぶせられた。昼は顔に墨を塗り、黒いカードを首にかけ、三角帽をかぶった姿で批判闘争大会に引きずり出された。夜は当時「牛小屋」(「牛棚」)と呼ばれた収容施設で自己批判文を書かされる毎が続いた⁸⁷⁾。

印経院が「破四旧」の対象となっていることを知った書記は、獄中から造反派と軍の代表に印経院のもつ学術的価値を訴え、破壊の標的から外すよう懇願したが、到底聞き入れてもらえなかった。逆に「封建主義、資本主義、修正主義の代理人」、「反動分子」の罪名を着せられ、更に厳しい批判にさらされた。そこで意を決した書記は、印経院の危機と保護を訴える嘆願書を書いて靴底に隠した。ある日食事を届けに来た妻に、補修を装って靴をそっと手渡した。書記が一縷の望みを託した相手は周恩来首相

であった。嘆願書は夫人から天津にいる妹の手を経て、無事首相に届けられた。事態を重く見た周恩来は直ちに印経院を保護するよう指示を発し、書記の願いは叶えられた⁸⁸⁾。

ヤンリンドジェは、当時人口わずか4万人余りのデルゲ県党委員会書記にすぎなかったが、獄中から首相に直訴したことでチベット人の貴重な文化遺産が窮地を脱することができた。当時書記が党中央と解放軍に太いパイプを持っていたことを考慮すれば、この逸話は中国共産党が宗教政策・民族政策を宣伝する目的で作った美談とは言い切れないと筆者は考える。

ヤンリンドジェの経歴を考える上で最も重要な点は、東チベット民主青年同盟(東蔵民主青年同盟、1949年9月成立、以下「同盟」と略す)を通じた中国共産党との関係である⁸⁹⁾。同盟は中国共産党康蔵辺地工作委員会(通称巴塘地下党、1949年8月成立)が指導した組織であり、巴塘(パタン)に本部が、理塘(リタン)と徳格(デルゲ)に支部が置かれていた。主要な構成員はプンツォクワンゲル、昂旺格桑、刀登、海正濤(恭布澤仁)であった。海正濤は1936年5月、紅軍長征時期にボバ人民共和国ボバ自衛軍総司令部総司令を務めたことで有名である⁹⁰⁾。

ヤンリンドジェは1931年に現在の四川省巴塘県に生まれ、1944年国立巴安師範学校に学んだ。この頃彼はプンツォクワンゲルや昂旺格桑、刀登等が共産党活動に従事していることを知り尊敬の念を抱いていたと言う。1949年9月、刀登(1939年に巴塘で共産党活動に従事した草創期の幹部)の紹介で同盟に加入し、11月中国共産党への入党申請を行った。その後、同盟第三支部副書記、第四党小組組長となり、積極的に共産党の理論を学んだ。こうして彼は中華人民共和国成立前夜、中国共産党の地下組織が指導するチベット人活動組織の青年幹部となった⁹¹⁾。

彼ら同盟員は、解放軍のチベット進軍(1950年)とチベット解放(1951年)、康蔵公路建設(1954年完成)を積極的に援助したことにより、党と軍の歴史に大

きな足跡を残した。第18軍先遣部隊や進軍部隊に加わり前線で銃を握る者もいれば、後方で食糧確保や情報収集、翻訳や通訳、道路建設に奮闘する者もいた。1950年10月のチャムド(昌都)戦役にも従軍し、主導的役割を果たした。とりわけチベット進軍の過程で、各地域の土司や首領、寺院の高僧への統一戦線活動や党の民族政策・宗教政策の宣伝活動で同盟員は大きな役割を果たした⁹²⁾。共産党がチベット政策を有利に進めていった背後には、ヤンリンドジェ等同盟の活動家による献身的なはたらきがあったのである。

チベット解放を指揮していた党西南局第一書記の鄧小平や解放軍総司令の朱徳は後に、彼らを共産党の有能な片腕として高く評価した。1950年代以降、200名を超える地下組織や同盟のメンバーが、党のチベット政策を支える地方民族幹部として重用されたことがそのことを如実に物語っている。ただし共産党の戦略的行動を援助した同盟員に不満を抱くチベット人も多数存在しており、チベットと中国の間に横たわる敏感な歴史問題ともなっている。

印経院の保護を訴えるヤンリンドジェの嘆願書が周恩来に確実に届き、周恩来がそれに応えた背後には、彼が同盟での活動を通じて党中央と解放軍との間に築いた信頼関係があったと筆者は考えている。ただし現時点で、周恩来の印経院保護に関する資料は探し出せていないが、当時周恩来がチベット仏教徒と縁が深い雍和宮(北京)、外八廟(承德)や宝光寺(四川省新都)等を文革の破壊から守り、紅衛兵の批判にさらされていたパンチェン・ラマ10世の保護を解放軍に指示したことを考えれば、印経院をめぐる対応は十分納得がいくと筆者は考える⁹³⁾。

文革終息後、ヤンリンドジェがチベット自治区党書記や四川省政府副省長等、党・政府の要職を歴任したことから考えると、党中央にとって彼は信頼の厚い民族幹部であったと言えよう。2000年3月、当時の国家副主席・胡錦濤が成都のヤンリンドジェ宅を表敬訪問していることから、彼と党中央の密接な関係をうかがい知ることができる⁹⁴⁾。

こうして二人の書記と周恩来の努力が実を結び、印経院は被害を最小限に抑えることができた。しかし、印経院が狂乱政治の刃から受けたのはかすり傷程度ではなかった。筆者はデルゲでの調査で、「紅衛兵は何度も印経院を襲い、版木を持ち去ったり焼き捨てたりした」「素手で抵抗した診療所の医師(僧侶)は負傷し、版木を守り切れなかった」という話も聞いた。ただし彼らの証言には、自らの見聞と第三者からの伝聞が入り交じっており、要領を得ない部分もある。

その後の報道には次のような記述が見られる。

1月17日午前、数人の「造反派」が印経院を襲撃し版木を奪ったが診療所の医師がそれを阻止した。昼頃複数の「造反派」が集まり、午後印経院を襲い院内のすべての「四旧」を叩き潰す相談を行った。事態が最も緊迫したまさにその時、軍隊が出動して直ちにデルゲ印経院を保護した。⁹⁵⁾

当時県委員会第一書記が紅衛兵のやり方に抗議しつつ、内部ルートを用いて周恩来総理に状況を報告した。デルゲ印経院は最終的に県「人民武装部」の出動により、今日まで概ね良好に保存されてきた。⁹⁶⁾

印経院は文革中に、建物にも版木にも何らかの被害が出たことは間違いないが、当時のヤンリンドジェ書記から周恩来総理への働きかけが功を奏し、総理が軍の出動を命じたことにより被害を小さくとどめることができたと考えられる。当時の詳細な状況は依然として不明であるが、2005年に新たな資料が公開された。

7.5 程徳美の進蔵長征隊

程徳美著『高山反応——程氏一家四代的西藏情结』(中国蔵学出版社、2005年)は、首都継紅進蔵長征隊が目撃した解放軍出動前夜の印経院の様子が描かれている点で極めて重要な資料である。首都継紅

進蔵長征隊は、文化大革命初期に行われた「大串連」(大交流)の潮流の中で誕生した紅衛兵の一組織である。1966年9月5日、党中央と国務院が地方の学生や教職員に文革運動を見学し、革命経験の交流のために上京するよう呼びかけたのが「大串連」の始まりである。「大串連」は北京の紅衛兵運動を全国に飛び火させる役割を果たしたが、数千万人を無料で輸送したため国家財政の大きな負担となり、鉄道輸送の混乱で生産にも重大な影響が出た。そのため1966年10月末以降、1930年代の紅軍長征にならい徒歩による移動が奨励された⁹⁷⁾。このような社会情勢の中で首都継進蔵長征隊(図12)は結成された⁹⁸⁾。



図12 徒歩でラサへ向かう紅衛兵の程徳美たち(1966年)
Fig.12 Cheng Demei and other Red Guards heading for Lhasa on foot (1966)

彼らは1966年12月6日に四川省成都を出発し、翌年3月3日にチベット自治区ラサへ到着した。川蔵公路2,414kmの内、1,904kmを徒歩で移動した。構成員を以下に示す。

- 程徳美, 19歳, 北京47中高三(著者)
- 梁強, 19歳, 北京清華附中高三
- 沈云彪, 19歳, 北京47中高三
- 達嘎, 14歳, チベット族, 四川康定商專
- 孫躍民, 14歳, チベット族, 四川康定商專
- 程徳保, 23歳, 北京工業大学無線電專業三年
(著者の兄)

程徳尚, 13歳, 小学卒業(著者の弟)

程徳美, 梁強, 沈云彪の三人は1966年11月末に「進蔵宣言」を執筆し、チベット自治区駐四川辦事処より入蔵許可証を得た。四川省委員会より生活費, 医療費, 宣伝費として各人三十数元, 食糧切符四十数斤, その外毛主席像, 老三篇, 語録カード, 「十六条」手冊等を受け取った。雅安, 康定, 甘孜を経て, 程徳美が徳格に入ったのは1967年1月13日の夜であった。この時程徳美は徳格の手前約25kmの柯鹿洞という村に滞在中であり, 彼の兄と弟は先に徳格に入っていた。程徳美は柯鹿洞で兄からの手紙を受け取った。その件を以下に引く⁹⁹⁾。

柯鹿洞で徳格方面から来た車が運んできた手紙を受け取った。その手紙は兄が書いたものであり, 彼と弟はすでに徳格に到着していた。手紙の大意は次の通り。ラサから来た紅衛兵と県城(更慶鎮: 川田注)の紅衛兵がデルゲ印經院を襲撃した。大変な状況なので我々に一刻も早く徳格に来てほしい。

程徳美はすぐに村長を訪ね電話を借りて徳格と連絡をとると, 紅衛兵が更慶寺の経堂と仏殿を襲ったことがわかったので, 馬を借りて徳格まで走らせた。到着した翌日に状況を確認すると, 兄と弟が洗面器一杯の宝石を預かっていることがわかった。宝石は紅衛兵が更慶寺を襲撃した際に仏像から剥ぎ取ったものであり, その後の処置に困り北京から来た紅衛兵である兄と弟に託したのであった。ラサの紅衛兵と相談し, 宝石は軍と県党委員会に預けることにした。その後, 寺院に行くと建物の被害は小さかったが, その他のものはことごとく押し倒されていた。床には一面にチベット文字を刻んだ版木が投げ出され, 仏像が倒れていた。階上には十数歳の僧侶が一人いた。孫躍民(チベット人)が確認したところ, 彼は更慶寺の活仏であった。政府から毎月十数元的生活費の支給を受けて暮らしていることがわかった。

程徳美は「1967年1月、紅衛兵が徳格に押し寄せたため、印経院は有史以来の大惨事に見舞われた」¹⁰⁰⁾と書いている。兄からの手紙にも「ラサから来た紅衛兵と県城の紅衛兵がデルゲ印経院を襲撃した」とあり、1月に印経院が大きな被害を受けたことは間違いない。ただし、被害の具体的な状況は不明確である。「床には一面にチベット文字を刻んだ版木が投げ出され、仏像が倒れていた」のは、印経院と考えていいだろう。印経院は更慶寺に隣接しており、開設以来更慶寺の僧侶が管理運営にあたってきた。床に版木が投げ出されていたということは、版木の一部は紅衛兵に略奪されたと考えられる。

程徳美が徳格に到着したのは1月13日夜であり、14日は徳格に滞在し、15日に出発し崗托に向かった。造反派が印経院を襲い、解放軍が鎮圧に当たったのは二日後の17日であった。『徳格県志』には文革中の被害状況が次のように記されている¹⁰¹⁾。

解放後、党と政府は印経院の版木を保護する活動を重視したため、これまで「民主改革」と「四反運動」を経験したが、印経院の建築物及び版木には全く被害はなかった。ただし、「文革」の「四旧」打破の時期には印経院は版木の一部を失ってしまった。1979年文物管理事務所の調査により、「文革」中に失った200枚余りの版木は県、区、郷政府が職員を動員し宣伝活動を行った結果、民衆は次々と115枚の版木を返却した。

一方、徳格の政治と宗教に詳しい澤爾多杰は、文革中に「印経院に保管されていた資料や文献の一部は造反派に持ち去られてしまった。そして民主改革においても少数の者の極「左」行為により、印経院の貴重な文物の一部が国外へ運び出された」と述べている¹⁰²⁾。民主改革においても版木盗難の被害はあったと考えられるが、真相を解明するための文献や証言を入手することは現在極めて困難な状況にある。印経院は19世紀末、第19代土司の時代にも危機に

直面し版木を大量に失っている。当時土司夫妻の不仲が原因で、妻が瞻対(ニャロン、現在の四川省新龍県)の官吏へ私的に贈与し、『仁青丁着』(『宝庫論』)の版木約三万枚を八邦寺に売却したと伝えられている¹⁰³⁾。

8. 文革後の印経院復興政策

8.1 チベット亡命政府使節団

文革終息直後、デルゲは近隣の他県と同様に経済活動が停滞し、主要寺院は壊滅状態にあり、民心は極度に疲弊し町全体が重苦しく沈んでいた。一方、印経院の復興計画は四川省政府と徳格県政府の間で着々と練られていた。筆者はその背後に党中央の政治的思惑があり、1979年と1986年に大きな転機が訪れたと考える。

診療の傍ら版木を守っていた診療所は、1978年徳格県蔵医院の完成に伴い印経院を引き払った¹⁰⁴⁾。翌年5月、徳格県革命委員会と県政府は徳格県文物管理所を開設し、印経院の管理と保護に当たらせ、同時に經典印刷の再開を許可した¹⁰⁵⁾。印刷再開は実に21年振りであったが、印刷可能な文献は全体の一部に過ぎなかった。民主改革と文革の嵐のなかで版木の一部は失われ、残った大部分の版木も手入れされることなく保管状況は良好とはいえなかった。そのため試験的に印刷された文献は大学、研究機関、档案馆等へ寄贈され、寺院向けに販売されることはなかった¹⁰⁶⁾。建物本体は柱や梁に深刻な損傷が見られ、土壁は広範囲に亀裂が走り、壁画や塑像も騒乱で壊されていた。被害の程度が判明すると、四川省政府は即座に2万元の予算を投じて緊急に補修を命じた¹⁰⁷⁾。ただし、痛みの激しい柱と梁を交換し、外壁に化粧直しを施しただけの応急的な処置であった。

1979年に仮補修を行い準備が不十分な段階で印刷を再開した理由は、インドのチベット亡命政府と鄧小平の間で交渉が始まったからである。1978年鄧小平はギャロ・トゥンドゥップ(ダライ・ラマ14世の兄)との事前交渉で、「ダライ・ラマの代表団は、チ

ベットの現地を考察できる」ことを表明していた¹⁰⁸⁾。1979年3月12日、鄧小平はギャロ・トゥンドゥップと公式に面会し、ダライ・ラマ帰還の条件について意見を交わした。交渉は進展し、ダライ・ラマ法王日本代表部事務所によると、1979年と80年に三度使節団がチベット視察を行った¹⁰⁹⁾。

- (1) 1979年8月 第一次使節団(代表カロン・ジュチェン・トゥブテン・ナムギャル)
- (2) 1980年5月 第二次使節団(代表テンジン・テトン)
- (3) 1980年7月 第三次使節団(代表ジェツン・ペマ:ダライ・ラマ14世の妹)

『徳格県志』によれば、1979年10月末、第一次使節団5人が徳格を視察したという記載がある¹¹⁰⁾。具体的な視察場所は不明であるが、徳格へ来た目的はチベット人の誇りである印経院の現状視察と考えるのが自然であろう。続いて1980年9月13日、第三次使節団が徳格に到着した。一行は14日に徳格中学、城関小学、印経院、蔵医院、崗托金沙江大橋を視察した。四川省政府は第一次訪問団来訪前に印経院の補修と印刷再開を行い、第三次訪問団来訪前の1980年7月7日に印経院を「古建筑及歴史紀念建築物」及び「四川省重点文物保護単位」に指定した¹¹¹⁾。

この一連の慌ただしい動きは、中国政府がチベット亡命政府に対して行った宗教保護政策の宣伝活動である。ダライ・ラマ14世の亡命後、印経院の職人の中には法王のあとを追ってインドへ逃れていった者もいる。チベット文化圏にある仏典や文献の約7割がデルゲ印経院に収められている事情から、使節団は印経院の被害状況に強い関心を示したのである。それに対し中国政府は、文革中に行った印経院への保護と今後の復興政策を通してチベット文化とチベット仏教を重視する姿勢を鮮明に打ち出すことで体裁を繕い、亡命政府との軋轢を弱め交渉を有利に進めようとしたのである。同じく第三次使節団の来訪の直前に(1980年9月)、四川省政府は徳格県中学にチベット人クラス(40人、4年間)を新設し、チベット語教材を使用しチベット語による授業を開始

した¹¹²⁾。学費と生活費はすべて政府が負担した。印経院の事例も中学の事例もともに、政府の対外的な政治宣伝活動の一環として行われたのである。

8.2 成都と北京の蔵書

1979年～80年当時の印経院は印刷業務を部分的に再開していたが、それは復興へ向けての第一歩を踏み出したに過ぎなかった。目前の課題は失った版木を彫り直し、建物本体や壁画、塑像の本格的な補修を早期に進めることであった。印経院がデルゲ土司の手を離れた後、政治の動乱の中で貴重な版木が失われたことは事実である¹¹³⁾。文革終息後、印経院は失った版木の原本をいかにして入手したのであろうか。このことを説明する資料は二つある。共通している点は政治からの要請ではなく学術の力が文献の収集を進展させたことである。

一つは成都の西南民族大学博物館の蔵書である¹¹⁴⁾。1951年設立時の校名は西南民族学院であり、当時の学院長王維舟(西南民族委員会主任を兼任)は少数民族の文物収集を提唱していた。これを受けて、西南少数民族訪問団や少数民族の名士が西南民族委員会へ寄贈した各種文物を西南民族学院が保管することとなった。こうして1952年9月、学院は民族文物陳列室を開設し、その後博物館へと発展していった。現在博物館には西南少数民族文物陳列室、藏族宗教文化陳列室、藏族面具陳列室があり、書庫には大量の文献が収蔵されている。その中に1940年代にデルゲ印経院で印刷された文献500余函がある。

もう一つは北京の国家図書館の蔵書である¹¹⁵⁾。1950年代に言語学者の于道泉が北京図書館(現在の国家図書館)の顧問として招かれた。彼はチベット語、モンゴル語、サンスクリット語に通じ、早くからこれらの文献の収集と保管に精力を注いできた。1958年李徳啓(言語学者)と協議の結果、中央民族学院(北京)と協力して徳格の更慶寺と八邦寺の版木を可能な限り印刷し北京図書館に収蔵することを決定した。1958年は徳格で民主改革による闘争が激しさ

を増していた時期であり、于道泉と李徳啓は貴重な版木が散逸することを危惧し緊急に文献の収集を指示したのである。現在、国家図書館が所蔵しているデルゲ版の経典、文献は次の通りである。

大蔵経：『甘珠爾』102函、『丹珠爾』432函

文集：計37人，約500函

叢書：263函

その他：約300函

8.3 パンチェン・ラマ10世の徳格視察

次に印経院本体の補修計画について説明する。徳格で党と政府の活動に長年従事し、チベット学に詳しい澤爾多杰によると、概ね次のような経過をたどった¹¹⁶⁾。

【1979年12月31日】徳格県文教局は徳格県革命委員会にデルゲ印経院の補修に関する報告書を提出した。

【1981年9月16日】徳格県人民政府は「徳府発(1981)35号文件」を出し、甘孜州党委員会と甘孜州政府に対して「關於徳格印経院維修計画的報告」を提出した。その後、甘孜州政府は多方面にわたる調査を経て、四川省政府に報告を送った。

【1984年4月18日】四川省政府は「議事記要」にて補修計画を認可した。

【1984年9月】徳格県政府は「徳府発(1984)55号文件」にて「維修印経院領導小組」の成立、趙国寅組長(副県長)、土登澤仁副組長(県政治協商会議副主席)、澤爾多杰委員(県宗教事務局局長)の任命等を通知した。

こうして印経院本体の補修工事の実施に向けて四川省政府の認可を得ることができたが、同時に二つの難題に直面していた。一つは予算の獲得であり、もう一つは補修方法をめぐる議論の調整であった。躯体の取り替えや外壁の新調も含めた大規模な補修を望む声もあれば、内装補修に限定する声もあった。チベット仏教の叡智を収めた聖なる場所である

ため、一切の補修を禁じる要望も出された¹¹⁷⁾。議論が百出する中、具体的な計画はまともらず地元は疲弊の色が濃くなっていった。

1985年のある日、徳格に吉報が届けられた。中央政府が徳格の仏教復興資金として170万元の支出を決定したのである¹¹⁸⁾。内訳は印経院に50万元、更慶寺、八邦寺、俄支寺、ケサル記念堂の修復に120万元が割り当てられた。翌年8月から10月にかけて、パンチェン・ラマ10世がデルゲを含む四川省甘孜州や雲南省迪慶州、チベット自治区昌都地区を視察したことから考えると、徳格のみならず四川チベット地区各地への復興資金は中国政府からパンチェン・ラマへのささやかな贈り物でもあった。中央政府とパンチェン・ラマの関係は決して良好ではなかったが、政府はチベット地区における政治の安定と経済の発展を促すにはパンチェン・ラマが果たす役割が重要と考えたのである。

1986年8月27日、パンチェン・ラマ一行が徳格に到着した¹¹⁹⁾。彼が最も心配していたのは印経院の置かれている状況であった。5日間の滞在中、彼は各方面の責任者に意見を求め精力的に動き回った¹²⁰⁾。パンチェン・ラマの強い意向も働き、二年後の1988年印経院の大型補修計画(「徳格印経院維修方案」)がようやくまとまった。パンチェン・ラマが印経院に注いだ熱意は、大きな遺産として今も徳格で語り継がれている。補修を担当する部署が新たに設置され、土登澤仁活仏が最高責任者に任命された。必要な木材は徳格と江達から計32,000m³が調達され、約325万元の費用と3年の歳月を費やした大型補修が完了したのは1991年であった。

竣工式が行われた10月1日国慶節(中華人民共和国建国記念日)の日、式典で祝辞を述べたのは建国後印経院を守ったかつての書記ヤンリンドジェとケンラブ(欽繞)であった¹²¹⁾。この時ヤンリンドジェは四川省政治協商会議副主席として、ケンラブは甘孜州政治協商会議主席として講話を行った。多額の資金を投じた印経院の復興事業は、中国共産党の宗教

政策と統一戦線活動の成果を内外に示すものであった。対内的には民主改革と文革で傷ついたチベット人の誇りを守り、対外的にはチベット亡命政府に対して党の宗教保護政策をアピールする狙いがあった。「民族分離主義者のデマと誹謗をはねのけた」という澤爾多杰の言葉がそのことを如実に物語っている¹²²⁾。

8.4 印経院の管理運営

2008年現在、印経院院長は澤旺吉美・塔徳寺第17代活仏である(1971年徳格県央達村の生まれ、図13)¹²³⁾。彼の経歴の中で最も注目される点は、1995年24歳の時に徳格県、甘孜州、四川省の審査を経て、建国後四川省チベット地区で初の政府認定の活仏となったことである。その後、1997年から99年まで北京の中国蔵語系高級仏学院で仏教学の他に漢語や政治経済、政府の宗教政策を学んだ。1998年以降、徳格県政治協商会議副主席、徳格県仏教協会副会長、四川省政治協商会議委員となった。活仏を政府の要職に登用することは統一戦線活動の重要な任務であり、政治と宗教の共存及び政治による宗教の監視を意図している。中国共産党が定めた枠内で党の宗教政策に沿った活動を行うことが求められ、政府から「愛国活仏」と呼ばれている。党の要請で「愛国活仏」の道を歩むことを余儀なくされた塔徳活仏の運命は、印経院とチベット仏教にとって不幸なことである。



図13 デルゲ印経院院長・澤旺吉美(中央)

Fig.13 Jimei Rinpoche, Headmaster of Dege Sutra-Printing Academy (in the center)

1979年5月印経院の業務再開に伴い、印経院を管理する部署として徳格県文教局の指導下に県文物管理所が設けられた。その後1985年11月、四川省政府と甘孜州政府の指示により、徳格県文物管理所は徳格県印経院文物管理所へ名称変更され、同時に行政面は宗教局が指導し、業務面は文教局が指導する新体制に移行した¹²⁴⁾。これにより中央政府の宗教活動に対する締め付け政策に連動して、県宗教局は印経院の活動に制限を加えることが可能になった。1986年に印経院文物管理所が伝統的な手刷りから機械印刷への変更を試みたのはその一例である¹²⁵⁾。組版機と印刷機を購入し印経院に早急な近代化を促すことで、宗教的要素を弱めようとしたが、職人たちの抵抗と印刷のコスト高により頓挫してしまった。印経院では長年、印刷開始日(チベット暦3月15日)と終了日(9月20日)には、更慶寺の僧が招かれ盛大な儀式が執り行われていたが、民主改革により土司制度が廃止になった後は、当局の意向でその他の宗教儀式も簡素化や廃止を余儀なくされた¹²⁶⁾。

経典や文献など印刷物の販売価格は、1979年以降徳格県党宣伝部と文教局が協議した後、四川省と甘孜州の宗教、文化、物価を管轄する部署が決定されるようになった。1979年から88年までの10年間で、印刷物の販売、運輸、内外の賓客への接待等で印経院の収入は合計約1,600万元あった。その内303万元は県の財政に組み込まれ、94.4万元を納税した。人件費や材料費等の必要経費に約700万元、県内の土木事業や教育、通信整備等に約300万元、印経院の補修費用に約200万元を支出した¹²⁷⁾。土司時代、印経院の財務管理は更慶寺から選出された幹部僧が行っていたが、1985年以降県の宗教局と文教局が担当し、政府当局の運営に対する発言力が強化されていた。事業収入を政府が管理することで、印経院と更慶寺は自主的な運営と宗教活動に一定の制約を受けることが常態化していったのである。

8.5 世界文化遺産と当局の思惑

2005年デルゲ印経院では世界文化遺産申請へ向けての取り組みが始まった。それに伴い伝統的技法への回帰も模索が始まった。例えば、紙は長年白玉地方の農家が自分で漉いたものを土司に納めていたが、印経院が閉鎖された約20年の間に紙漉き農家は大幅に戸数を減らしたため、四川省雅安県の製紙業者から買い付けざるを得なくなってしまった。2000年にアメリカのある財団が印経院の現状を憂えて、伝統的な紙漉きを復活させるための助成金提供を申し出た¹²⁸⁾。このことが契機となり、印経院ではチベット式製紙法が再開され始めた。外部委託に頼っていた墨や朱砂、各種工具類も現在本格的な伝統技法へ回帰する方向に進みつつある¹²⁹⁾。

印経院のこうした新たな取り組みは、チベット仏教と地域の伝統文化を継承していく上で有利にはたらくことは間違いない。ただし、世界遺産への申請活動は、貴重な文化を保護するという理念を掲げつつも、実際の狙いは観光を中心とした地域開発にあることは、九寨溝(世界自然遺産、四川省アバ州)の例を見れば明らかである。デルゲ県を統轄する甘孜チベット族自治州政府は、「手つかずの自然とチベット伝統文化」をキャッチフレーズに複数の観光ルートを整備中である¹³⁰⁾。その拠点になると考えられているのが、デルゲ印経院と丹巴(ロンダ)の石塔群である(世界遺産へ申請中)。印経院の申請手続は現在四川省での審査を終えた段階にある¹³¹⁾。登録が実現すれば、カンゼ州観光開発の起爆剤となるであろう。現在申請活動と並行して、成都からデルゲに至る幹線道路(川蔵北路)の大改修工事が行われており、沿線に広がるチベット人民家に立ち退きを迫っている。各地で無計画な再開発事業が進められ、鉄筋コンクリートのホテルや商業施設が、周囲の景観を大きく損なっている。世界遺産登録実現に向けたインフラ整備という大義名分を掲げて、今後も乱開発に拍車がかかることは間違いない。

印経院は1996年に国の重要文化財に指定された

後、にわかに国内外の注目を集めるようになった。そして、閉ざされた神秘的空間から、外部に開かれた印刷工房へと変貌していった。その背後には厳しい財政事情もある。1980年代は一年で200万余元余りの売り上げがあったが、2000年には40万元ほどに落ち込んでしまった。印経院では『カンギュル』を約5900円で販売しているが、外部の機械印刷による価格は1,300元程である¹³²⁾。こうした印刷環境の変化が印経院の観光化に拍車をかけているのが現実である。近い将来、信仰心を持たない中国人(主に漢人)観光客が次々と印経院を訪れ、印経院の管理運営から宗教色が薄められ、中央政府や四川省政府の意向を反映した運営がなされる心配がある。観光価値を高めるための形式的な伝統継承がなされ、形骸化した博物館となってしまうことも予想される。印経院は中国政府の文化遺産ではなく、国境を越えたチベット人全体の宝物である。政府の政治宣伝と経済振興の道具に利用するのではなく、世界各地のチベット仏教徒や国内外の非営利組織が資金援助を行い、運営に参画する道を模索していくことが望まれる。

9. 結論

デルゲ土司にとって印経院は権力の象徴であり、歴代土司は印経院の運営を通じて宗教面での指導力を発揮し、領民信徒の支持と信頼を得てきた。そして印経院は一族の重要な収入源でもあった。印経院の歴史の中で最も大きな転機は中華人民共和国の誕生であった。憲法で国民に宗教信仰の自由を保障しつつも、党と政府は宗教管理の部署を設置し、各宗教団体への統制を強めていった。同時に共産党は徳格での統治基盤を固める目的で首領の夏克刀登と最後のデルゲ土司(摂政)降央伯姆に対して統一戦線活動を行い、共産党への協力を取り付けることに成功した。民主改革(1956~58年)と四反運動(1958年)を経て、土司制度は解体され、1958年に印経院は活動停止に追い込まれてしまった。

建国後印経院は幾度か政治の動乱に巻き込まれたが、幸い致命的な打撃を被ることはなかった。その背後にはケンラブとヤンリンドジェという二人の書記の働きがあったことが判明した。1959年、ケンラブは閉鎖された印経院にチベット医学の診療所を開設し、医師に版木の管理を命じた。文化大革命が始まると1967年にヤンリンドジェは造反派の印経院破壊計画を知り、周恩来首相の力を借りて軍を動員し計画を阻止した。ヤンリンドジェの要望が周恩来に聞き入れられた背景には、ヤンリンドジェが建国直後に参加した東チベット民主青年同盟での活動実績があったと考えられる。ヤンリンドジェの働きにより印経院は破壊を免れたが、全く無傷であったわけではない。1966年に徒歩でラサを目指していた北京の紅衛兵程徳美と兄弟は、造反派に荒らされ解放軍が動員される直前の印経院を目撃していた。1967年1月前半に造反派が印経院を襲撃し、常駐する医師が抵抗したが、塑像や壁画は破壊され版木の一部が奪い去られるという被害が発生した。

文革終結後、印経院の重い扉を開かせたのは1979年と80年に徳格を訪問した亡命政府の使節団であった。印経院の活動再開は、文革被害からの復興そのものよりも亡命政府に対する政治宣伝を主たる目的としていた。1980年代、印経院の補修計画をめぐって徳格は紛糾していたが、1986年にパンチェン・ラマ10世が東チベットを視察したことで、四川省チベット地区はようやく復興事業が軌道に乗り始めた。21世紀に入り、東チベット各地で観光を柱とする経済振興策が活発化してきた。印経院は2005年から世界遺産登録を目指し事務手続が始まった。中国政府は申請理由に伝統的印刷技法の保護を謳っているが、同時にチベット仏教の弱体化と亡命政府への牽制も目論んでいる。このようにデルゲ印経院は中国共産党のチベット政策を読み解く上での重要な鍵の一つと言える。

(本研究は2008年科研費基盤 C(20510240)の助成を受けたものである)

【注】

- 1)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 421頁.
- 2)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 421頁.
龔伯勛「藏族文化宝庫——徳格印経院」, 『徳格印経院』四川民族出版社, 1981年, 1頁.
- 3)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 421頁.
- 4)池田巧「チベットの木版印刷の世界——デルゲパルカン研究への序説」, 池田巧・中西純一・山中勝次『活きている文化遺産デルゲパルカン——チベット大蔵経木版印刷所の歴史と現在』明石書店, 2003年, 124-125頁.
- 5)川田進「デルゲ印経院を守り抜いた書記と医師——周恩来のチベット政策と世界文化遺産・四川省徳格県」『火鍋子』第65号, 翠書房, 2005年, 86-99頁.
- 6)土司制度に関しては王柯の著作を参考にした。『20世紀中国の国家建設と「民族」』東京大学出版会, 2006年。『「天下」を目指して——中国 多民族国家の歩み』農山漁村文化協会, 2007年.
- 7)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 440-441頁.
- 8)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 58-59頁・442-443頁.
- 9)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 442-443頁・446-448頁・501-503頁.
- 10)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 442-446頁.
- 11)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 445頁。
『甘孜藏族自治州徳格地区社会調査報告』中国科学院民族研究所, 1963年, 2-4頁.
- 12)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 14-27頁・445-446頁.
- 13)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 446頁.
- 14)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 422頁.
- 15)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 422頁.
- 16)楊嘉銘『徳格印経院』四川人民出版社, 2000年, 25頁.
- 17)楊嘉銘『徳格印経院』四川人民出版社, 2000年, 28-29頁.
- 18)池田巧「チベットの木版印刷の世界——デルゲパ

- ルカン研究への序説」, 池田巧・中西純一・山中勝次『活きている文化遺産デルゲパルカン—チベット大蔵経木版印刷所の歴史と現在』明石書店, 2003年, 126頁・159-160頁.
- 19) 楊嘉銘『徳格印経院』四川人民出版社, 2000年, 25-28頁.
- 20) 楊嘉銘『徳格印経院』四川人民出版社, 2000年, 25-28頁.
- 21) 楊嘉銘『徳格印経院』四川人民出版社, 2000年, 27頁.
- 22) 楊嘉銘『徳格印経院』四川人民出版社, 2000年, 27頁.
- 23) 楊嘉銘『徳格印経院』四川人民出版社, 2000年, 21頁.
- 24) 『西藏旅游』2004年第3期, 14頁.
- 25) 楊嘉銘『徳格印経院』四川人民出版社, 2000年, 22頁.
- 26) 楊嘉銘『徳格印経院』四川人民出版社, 2000年, 22頁.
- 27) 楊嘉銘『徳格印経院』四川人民出版社, 2000年, 22頁.
- 28) 多田等観『チベット滞在記』(白水社, 1984年, 95-96頁)には1923年1月か2月, 多田明子・山口瑞鳳編『多田等観』(春秋社, 2005年, 20頁)には1922年11月とある. チベット暦と西暦による違いと考えられる.
- 29) 多田がダライ・ラマに謁見した日時は, 多田等観『チベット滞在記』(白水社, 1984年, 7頁)には1912年3月, 多田明子・山口瑞鳳編『多田等観』(春秋社, 2005年, 20頁)には4月15日とある. チベット暦と西暦による違いと考えられる.
- 30) 多田等観『チベット滞在記』白水社, 1984年, 7-9頁.
- 31) 多田明子・山口瑞鳳編『多田等観』春秋社, 2005年, 25-26頁.
- 32) 多田等観『チベット滞在記』白水社, 1984年, 76-77・89頁.
- 33) 多田等観『チベット滞在記』白水社, 1984年, 82-84頁.
- 34) 多田等観『チベット滞在記』白水社, 1984年, 84頁.
- 35) 多田等観『チベット滞在記』白水社, 1984年, 95頁.
- 36) 多田明子・山口瑞鳳編『多田等観』春秋社, 2005年, 30頁.
- 37) 多田等観『チベット滞在記』白水社, 1984年, 95頁.
- 38) 多田等観『チベット滞在記』白水社, 1984年, 95頁.
- 39) 多田等観『チベット』岩波書店, 1942年, 102-103頁.
- 40) 多田等観「パルカンについて」『日本西藏學會々報』第5号, 1958年9月, 3頁.
- 41) 池田巧「チベットの木版印刷の世界—デルゲパルカン研究への序説」, 池田巧・中西純一・山中勝次『活きている文化遺産デルゲパルカン—チベット大蔵経木版印刷所の歴史と現在』明石書店, 2003年, 147頁.
- 42) 「孫明経: 帯撮影機の旅人」, 『世紀長鏡頭』(CCTV『見証・影像志』2004年9月放映)
<http://www.cctv.com/program/witness/topic/geography/C12888/20040907/101402.shtml> [2005.5.18]
- 43) 張鳴「写在前面的話」, 『1939年: 走進西康』山東画報出版社, 2003年, 冒頭(頁表記無).
- 44) DVD『世紀長鏡頭』中国国際電視總公司, 2004年.
- 45) 『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 434頁.
- 46) 『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 437頁.
- 47) 楊嘉銘『徳格印経院』四川人民出版社, 2000年, 24頁.
- 48) 『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 423頁.
- 49) 山中勝次「版木・用紙の作成と周辺地域の植生」池田巧・中西純一・山中勝次『活きている文化遺産デルゲパルカン—チベット大蔵経木版印刷所の歴史と現在』明石書店, 2003年.
- 50) 「紙文化的時光之旅」

<http://202.108.249.200/geography/news/20020927/24.html>[2005.4.11]

- 51)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 292頁.
- 52)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 15・18・19・347・348頁.
- 53)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 440頁.
- 54)王貴・黄道群『十八軍先遣偵察科進蔵紀実』中国蔵学出版社, 2001年, 55-58頁. 『徳格県志』(四川人民出版社, 1995年, 23頁)には, 「6月9日徳格着」と記されているが, ここでは前者の記述をとる.
- 55)王貴・黄道群『十八軍先遣偵察科進蔵紀実』中国蔵学出版社, 2001年, 59-60頁.
- 56)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 23頁.
- 57)川田進「ゲダ5世に見る中国共産党のチベット政策と統一戦線活動」『大阪工業大学紀要人文社会篇』第52巻第1号, 大阪工業大学, 2007年10月, 45-81頁.
- 58)王貴・黄道群『十八軍先遣偵察科進蔵紀実』中国蔵学出版社, 2001年, 38-40頁.
- 59)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 23頁.
- 60)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 525-527頁・529-530頁.
- 61)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 529-530頁. 降央伯母が建国後に歴任した政府関係の職務は以下の通り.
西康省蔵族自治区人民政府委員
昌都解放委員会副主任
康定地区民族協商会副主任
西南民主婦女聯合会委員
全国民主婦女聯合会執行委員
西康省政治協商会議副主席
西康省婦女聯合会副主任
甘孜州人民代表大会副主任
甘孜州副州長
四川省政治協商会議第1, 4, 5, 6期副主席
全国人民代表大会委員等
- 62)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 287-288頁・290-292頁・445頁・448頁.
- 63)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 23-24頁・265頁.
- 64)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 530-531頁.
- 65)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 308頁.
- 66)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 463-464頁.
- 67)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 435頁.
- 68)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 435頁.
- 69)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 25-26頁.
- 70)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 25-26頁.
- 71)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 311頁・318-320頁.
- 72)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 309頁・311頁.
- 73)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 27-28頁・530-531頁.
- 74)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 435頁.
- 75)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 28頁・435頁.
- 76)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 427頁.
- 77)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 373頁・501頁.
- 78)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 373頁.
- 79)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 31頁.
- 80)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 266頁.
- 81)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 31-32頁.
- 82)八巻佳子「チベット語の興亡と出版物の現状」, 『アジア研ワールド・トレンド』18号, 1996年12月, 9頁.
- 83)『朝日新聞』(東京版夕刊)2001年10月22日, 8頁.
- 84)堀江義人「徳格印経院—チベット文化を死守」『天梯のくに チベットは今』平凡社, 2006年, 265頁.
- 85)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 266頁.
- 86)『徳格県志』四川人民出版社, 1995年, 266頁.
- 87)澤仁鄧珠「灑向雪域都是情—訪四川省政協原副主席楊嶺多吉」, 『四川蔵学研究(五)』四川人民出版社, 2002年, 23-24頁.
- 88)澤仁鄧珠「灑向雪域都是情—訪四川省政協原副主席楊嶺多吉」, 『四川蔵学研究(五)』四川人民出版社, 2002年, 23-24頁.
- 89)東チベット民主青年同盟及びプンツォクワンゲル

- については、阿部治郎『もうひとつのチベット現代史——プンツォク＝ワンギェルの夢と革命の生涯』（明石書店、2006年）に詳細な論及がある。
- 90) 楊嶺多吉「喚醒一段藏族革命歴史的記憶——紀念巴塘地下党和東藏民青成立五十周年」、『四川藏学研究(五)』四川人民出版社、2002年、1-3頁。
- 91) 楊嶺多吉「喚醒一段藏族革命歴史的記憶——紀念巴塘地下党和東藏民青成立五十周年」、『四川藏学研究(五)』四川人民出版社、2002年、4-5頁。
澤仁鄧珠「灑向雪域都是情——訪四川省政協原副主席楊嶺多吉」、『四川藏学研究(五)』四川人民出版社、2002年、22-23頁。
- 92) 楊嶺多吉「喚醒一段藏族革命歴史的記憶——紀念巴塘地下党和東藏民青成立五十周年」、『四川藏学研究(五)』四川人民出版社、2002年、8-9頁。
- 93) 何虎生『中国共産党的宗教政策研究』宗教文化出版社、2004年、144-145頁。降辺嘉措『班禪大師』東方出版社、1989年、150-160頁。
- 94) 澤仁鄧珠「灑向雪域都是情——訪四川省政協原副主席楊嶺多吉」、『四川藏学研究(五)』四川人民出版社、2002年、20-21頁。
- 95) 「雪域香巴拉文化宝庫——徳格」
http://tour.515see.com/fengsu/yishu/200701/outdoor_20070108194811_142039.html[2008.4.9]
- 96) 「掲開西藏謎底: 藏医藏伝仏教及土司制度」(2006年10月20日)
http://www.wutaishan.cn/fojiao/fjnews/jjdt/200610/678_11.html[2008.4.4]
- 97) 土田真靖「大交流」、『岩波現代中国事典』岩波書店、1999年、684頁。
- 98) 程徳美『高山反応——程氏一家四代的西藏情結』中国藏学出版社、2005年、55-67頁。
- 99) 程徳美『高山反応——程氏一家四代的西藏情結』中国藏学出版社、2005年、114頁。
- 100) 程徳美『高山反応——程氏一家四代的西藏情結』中国藏学出版社、2005年、116頁。
- 101) 『徳格県志』四川人民出版社、1995年、431頁。
- 102) 「掲開西藏謎底: 藏医藏伝仏教及土司制度」(2006年10月20日)
http://www.wutaishan.cn/fojiao/fjnews/jjdt/200610/678_11.html[2008.4.4]
- 103) 『徳格県志』四川人民出版社、1995年、431頁。
- 104) 『徳格県志』四川人民出版社、1995年、37頁・435頁。
- 105) 『徳格県志』四川人民出版社、1995年、435頁・437頁。楊嘉銘『徳格印経院』(四川人民出版社、2000年、37頁)には、1975年5月に印刷と販売が再開されたとあり、『徳格県志』の記述と異なっている。文革の終結時期と亡命政府使節団訪中の時期を考えれば、1979年再開と考えるのが妥当であろう。
- 106) 『徳格県志』四川人民出版社、1995年、437頁。
- 107) 『徳格県志』四川人民出版社、1995年、424頁。
- 108) 浦野起央『チベット・中国・ダライラマ——チベット国際関係史【分析・資料・文献】』三和書籍、2006年、625頁。
- 109) ダライ・ラマ法王日本代表部事務所
<http://tibethouse.jp/international/beijing.html>
[2005.6.20]
- 110) 『徳格県志』四川人民出版社、1995年、37-38頁。
- 111) 『徳格県志』四川人民出版社、1995年、435-436頁。
- 112) 『徳格県志』四川人民出版社、1995年、38頁。
- 113) 『徳格県志』四川人民出版社、1995年、431頁。
謝淑婧「国家図書館藏藏文古籍」
http://www.nlc.gov.cn/newpage/wjls/html/3_02.htm
[2005.4.11]
楊嘉銘「藏区歴史文化的瑰宝——西南民族大学博物館藏民族文化藏品」
<http://www.tibetmagazine.net/20034-p50.htm>
[2005.4.11]
- 114) 楊嘉銘「藏区歴史文化的瑰宝——西南民族大学博物館藏民族文化藏品」
<http://www.tibetmagazine.net/20034-p50.htm>
[2005.4.11]
- 115) 謝淑婧「国家図書館藏藏文古籍」
http://www.nlc.gov.cn/newpage/wjls/html/3_02.htm

- [2005.4.11]
「国家図書館蔵民族古文獻珍品暨北京市民族古籍工作展」
<http://www.nlc.gov.cn/newpages/publish/minzu/>
[2005.4.11]
- 116) 澤爾多杰「璀璨奪目的民族文化寶庫重放光彩——維修德格印經院工程親歷記」,『雪域康巴文化寶庫——德格』中国三峡出版社, 2002年, 55頁.
- 117) 澤爾多杰「璀璨奪目的民族文化寶庫重放光彩——維修德格印經院工程親歷記」,『雪域康巴文化寶庫——德格』中国三峡出版社, 2002年, 55-56頁.
- 118) 『德格縣志』四川人民出版社, 1995年, 40頁.
- 119) 『德格縣志』四川人民出版社, 1995年, 40頁.
- 120) 楊嘉銘『德格印經院』四川人民出版社, 2000年, 35頁.
澤爾多杰「璀璨奪目的民族文化寶庫重放光彩——維修德格印經院工程親歷記」,『雪域康巴文化寶庫——德格』中国三峡出版社, 2002年, 56頁.
- 121) 澤爾多杰「璀璨奪目的民族文化寶庫重放光彩——維修德格印經院工程親歷記」,『雪域康巴文化寶庫——德格』中国三峡出版社, 2002年, 56-57頁.
- 122) 澤爾多杰「璀璨奪目的民族文化寶庫重放光彩——維修德格印經院工程親歷記」,『雪域康巴文化寶庫——德格』中国三峡出版社, 2002年, 60頁.
- 123) 「澤旺吉美活仏」<http://www.zcfj.net/index1.aspx>
[2008.4.9]
- 124) 『德格縣志』四川人民出版社, 1995年, 435-436頁.
- 125) 『德格縣志』四川人民出版社, 1995年, 434頁.
- 126) 『德格縣志』四川人民出版社, 1995年, 439頁
- 127) 『德格縣志』四川人民出版社, 1995年, 438頁.
- 128) 「紙文化的時光之旅」
<http://202.108.249.200/geography/news/20020927/24.html>[2005.4.11]
- 129) 「揭開藏區最古老神秘印經院面紗」(2005年3月18日)
http://www.ebud.cn/new-news/culture/new-news_culture_20050514_2.html[2005.5.30]
- 130) 「後來居上看康巴——甘孜州州長暢談旅遊發展」
<http://www.gzznet.com/tour/infomation/200405/20040530103615.html>[2005.5.30]
- 131) 「德格印經院申報世界文化遺產文本通過省級評審」
<http://www.dege.gov.cn/Article/ShowArticle.asp?ArticleID=50>[2008.4.9]
- 132) 「德格印經院:木與紙的朝聖」(2006年3月29日)
http://www.tibet-web.com/whyj/lishi/t200060329_103673.htm[2008.4.9]

【圖版】

- 1) 川田攝影(2003年8月).
- 2) 川田攝影(2003年8月).
- 3) 孫明經攝影,張鳴撰述『1939年:走進西康』山東畫報出版社, 2003年, 196頁.
- 4) DVD『世紀長鏡頭』中国國際電視總公司, 2004年.
- 5) 孫明經攝影,張鳴撰述『1939年:走進西康』山東畫報出版社, 2003年, 207頁.
- 6) 孫明經攝影,張鳴撰述『1939年:走進西康』山東畫報出版社, 2003年, 208頁.
- 7) 孫明經攝影,張鳴撰述『1939年:走進西康』山東畫報出版社, 2003年, 209頁.
- 8) 孫明經攝影,張鳴撰述『1939年:走進西康』山東畫報出版社, 2003年, 210頁.
- 9) 孫明經攝影,張鳴撰述『1939年:走進西康』山東畫報出版社, 2003年, 216頁.
- 10) 孫明經攝影,張鳴撰述『1939年:走進西康』山東畫報出版社, 2003年, 211頁.
- 11) 王貴・黃道群『十八軍先遣偵察科進藏紀實』中国藏学出版社, 2001年, 卷頭.
- 12) 程德美『高山反應——程氏一家四代的西藏情結』中国藏学出版社, 2005年, 表紙.
- 13) 「藏伝仏教」<http://www.zcfj.net/index1.aspx>[2008.4.9]